

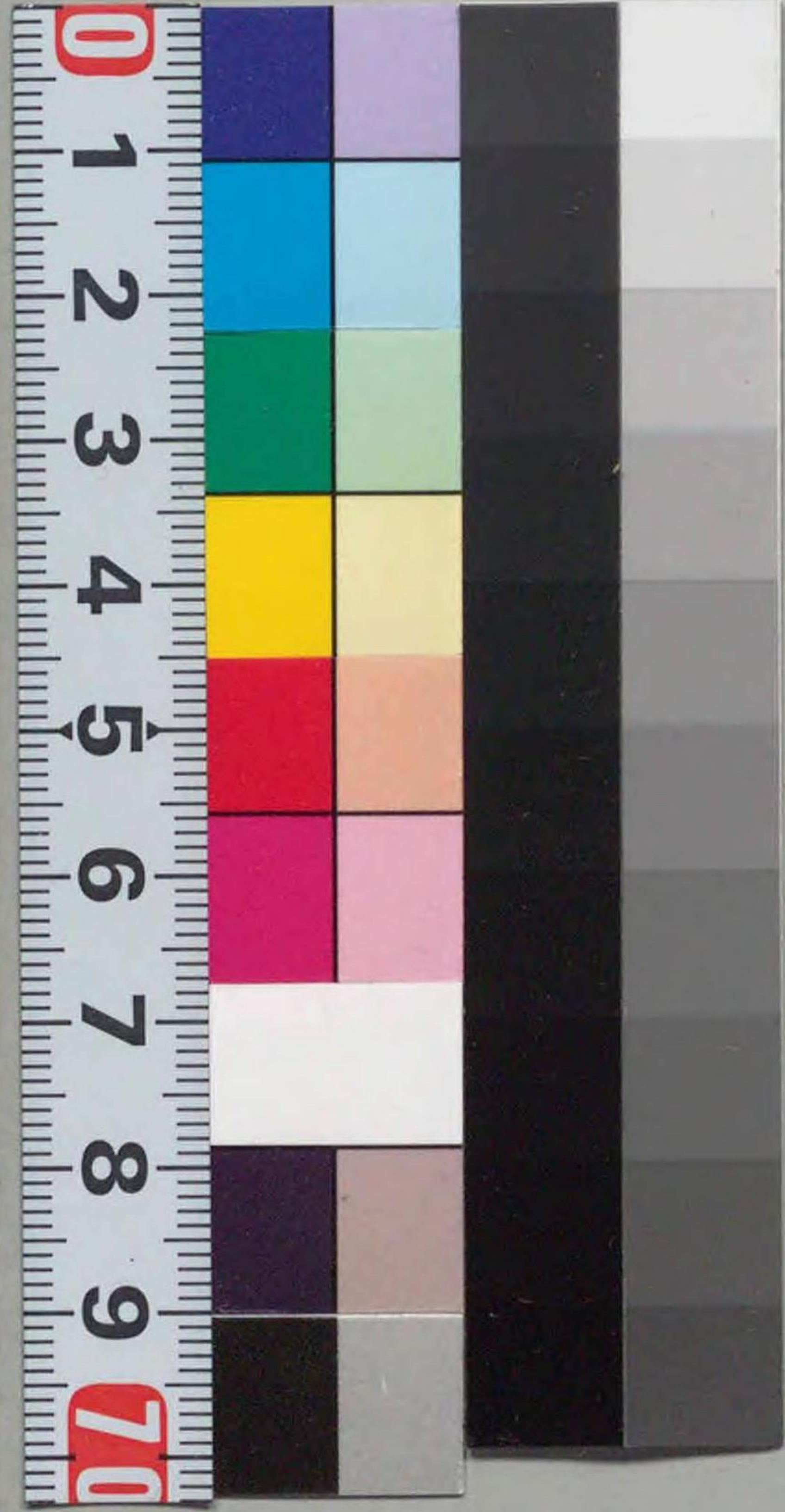
912.6
Ki264h

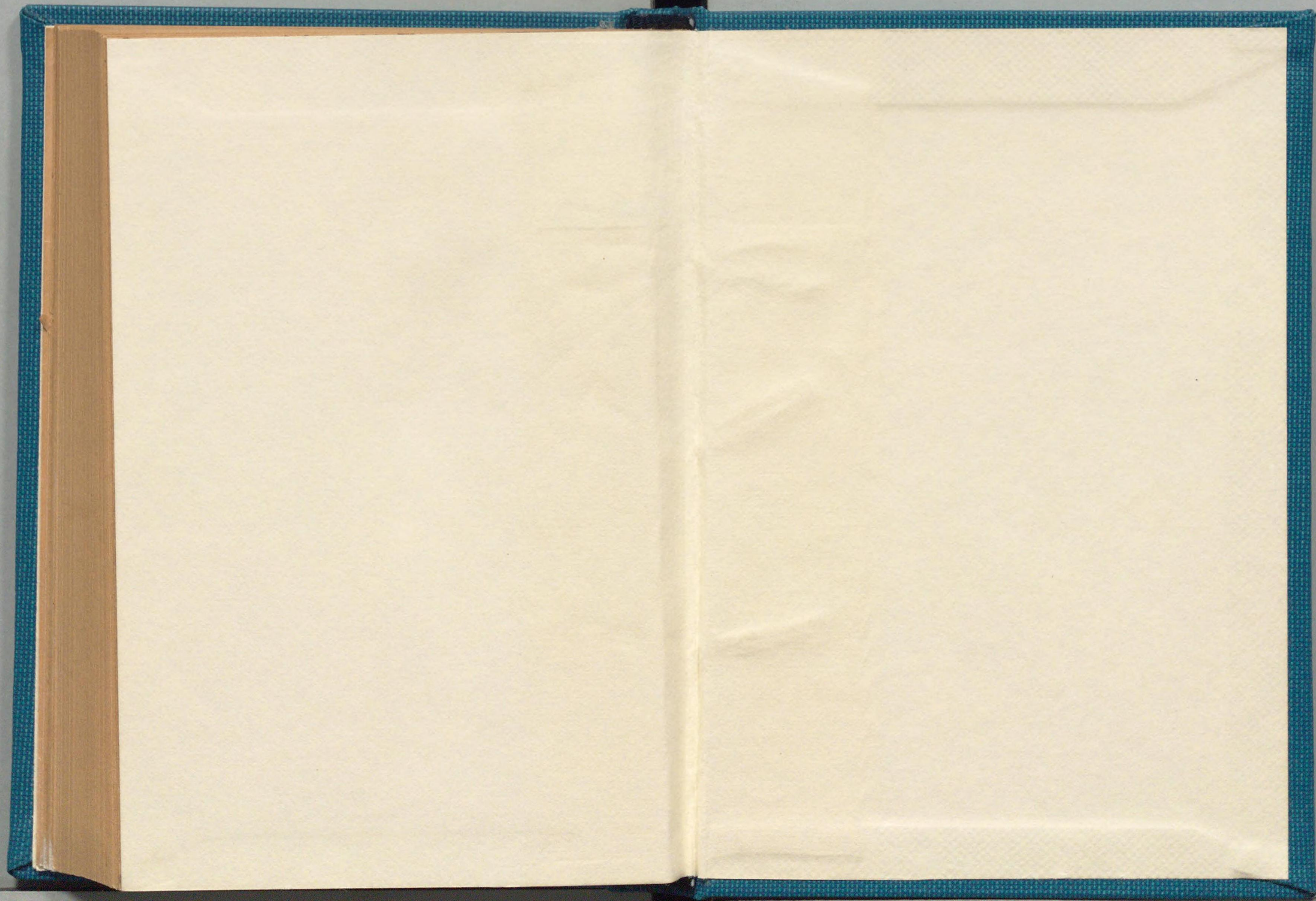


00272669

X
複写

912
Ki





912.6

Ki264

岩波文庫

4640—4641

古い玩具

他五篇

岸田國士作

岩波書店

岩波文庫

4640—4641

古 い 玩 具

他 五 篇

岸田國士作



岩波書店

古
い
玩
具
六
場

時 千九百××年の夏より秋にかけて

所 佛蘭西

人物 白川留雄

ルイーズ・モオブレ

手塚房子

手塚正知

ポオレット

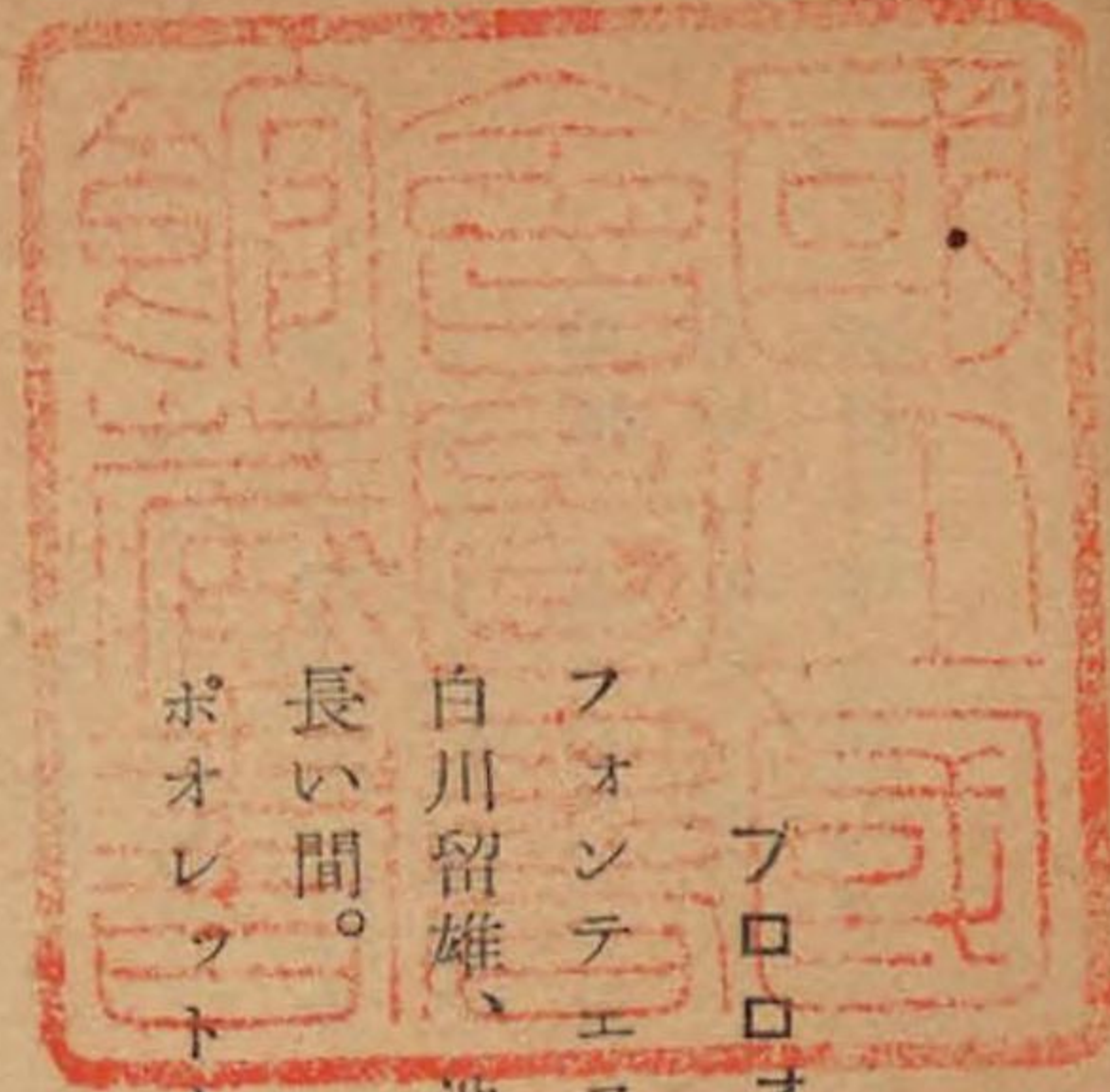
マルセル

ルイーズの女中

手塚の女中

ホテルの女中

無言役——老婦人、若い男二人、労働者風の男女



フロロオグ

フオンテエヌプロオの古城——池のほとり——日盛り過ぎ。

白川留雄、池の欄干に倚り、鯉にパンをやつてゐる。

長い間。

ポオレットとマルセル、腕を組みながら、留雄の後ろを通り過ぎる。

マルセル、それから、どうしたのさ。

ポオレット (留雄のゐるのに氣つき) お待ちよ、いつかのあれがあるから……。 (留雄の肩に手をかけ、馴れ馴れしく) 何してるの。

留雄 (振り向いて、さほど驚いた様子もなく、心もち眉をよせて、ポオレットの顔を見る)

ポオレット あたしよ、忘れたの。

留雄 (素氣なく背を向けて) 何か用か。

ポオレット (ちらとマルセルに笑ひかけ) 久しぶりね。

留雄 久しぶりだ。

ポオレット それでおしまひなの。

留雄 (遠くへパンを投げる)

マルセル 駄目よ、行かう。

ポオレット あんた、その後、西村さんに會つた。

留雄 會つたらどうした。

ポオレット 怒つてた。

留雄 怒つてると思ふなら、あやまりに行け。金が返せなければ、ほかの方法で話をつけるさ。

(正面を向く)

ポオレット いやなこつた、あんな猿。

マルセル (留雄の顔を見つめ、何か思ひ出したやうに吹き出す)

ポオレット (マルセルに) 何がをかしいんだよ。(留雄の顔を見て、これも何か思ひ出したやうに、吹き出さうとし

て) およしよ、くだらない。(マルセルの背をたく)

マルセル (大袈裟に) あいた。あたしをモデルに使つてくれない。

留雄 君は猿が好きと見えるね。(強ひて笑はうとする)

マルセル あんたは、そんなでもないわ。

留雄 (背を向けて) ありがたう。さ、向うへ行つた。(パンを投げる)

ポオレット (マルセルをちらみして) マルセルがね、あんたとどこかへ行きたいつて。

留雄 残念だが、今日は先約がある。

マルセル 誰かを待つてるの。

留雄 (黙つてパンを投げる)

ポオレット この娘、支那語で、「ありがたう」つて云へるのよ。

留雄 うるさいなあ。

ポオレット うるさいなあ。うるさけりや、勝手におしよ。(マルセルの手を引き遠ざかりながら) 野蠻人。

留雄 (ポオレットの方をにらむ)

マルセル (留雄を見返り) あの顔。

兩人姿を消す。長い間。

老婦人、手眼鏡を持ち、書物を読みながら通りすぎる。

若い男二人、舞踏の足取りにて、口笛を吹きながら通り過ぎる。

労働者風の男女抱き合ひながら通る。しばらくして、手塚房子現る。

房子 よく根気が續くわね。

留雄 来てご覧なさい。面白いから……。白鳥がね、麩麩を食ふのに、鯉の頭がじやまになるも

んだから、もぢもぢしてるんですよ。

房子 (留雄に寄り添ひ) あなた暑くない。

留雄 いいえ。(間) 手塚君たちは。

房子 もう来るわ。寫真で大騒ぎ、ルイズさんをあづまやに立たせるんですつて。あの人の趣

味よ。

留雄 森へ行くんぢやないんですか。もう日が暮れるのに……。

房子 ほんと。立ち通しぢやたまらないわ。

留雄 手塚君はあしたからでしたね、ジュネエヴの會議は。

房子 ええ。だからお遊びにいらつしやいね。

留雄 だからつて云ふこともないけれど……一週間でせう。

房子 ええ。(間) ああ、さう、さう。昨日、時子さんからお手紙をいただいたわ。

留雄 僕のところへも來ました。

房子 あなたのところへ、いくどお手紙を上げて返事を下さらないつて……わるいわ。妹さんに、なにも罪はないぢやないの。

留雄 嫁入りするつて、あなたのところへも云つて來ましたか。

房子 ええ。軍人さんですつてね。感心だわ、あの方。

留雄 何が感心です。

房子 それよりね、あたし大事な役目を云ひつけられたの。

留雄 へえ。

房子 へえぢやないのよ。あなた、何かお父さんのところへ云つてお上げになつたでせう。そのことで大へん心配していらつしやるんですつて、みなさんが。

留雄 だつて、勝手に僕を呼び戻さうたつて、さうは行きませんよ。それも下らない女を押しつけられるんぢやね。

房子 下らなかないんだつていふぢやありませんか。時子さんのお話ぢや。

留雄 あいつ、餘計なことを云ふんだなあ。

房子 それで、あなたどうなさるおつもり。

留雄 どうもかうもないぢやありませんか。

房子 お父さんが怒つていらつしやるんですつて。

留雄 おやぢがね。僕のところへは、母が泣いてるつて云つて來ました。

房子 さうでせうとも。

留雄 あなたまでが……僕を説き伏せるつもりですか。

房子 説き伏せるなんて、そんな力はあたしにはないでせうけれど、時子さんが、お父さまとあなたとの間に立つて、一人で氣をもんでいらつしやるから、それがお氣の毒ですわ。

留雄 あいつには、僕の心がまるでわかつてないんです。あなたにさういふご親切があるなら、こんだ、お序の時、よく云つて聞かしてやつて下さい。僕は、日本で暮すより、こつちで暮す方が幸福なんだつて……。

房子 あなたはさうおつしやるけれど……。

この時、ルイズ、大聲にて笑ひながら走り來る。

房子 どうなすつたの。

ルイーズ だつて、きりが無いんですもの。あづまやがすんだと思つたら、こんだは噴水の前、それがすんだら橋の上、もういいのかと思つたら、またあの階段の上へあがれつておつしやるの。あたし、それで逃げて来たの。

房子 寫眞機を持つと全くおしまひ、あの人は。(笑ふ)

ルイーズ (留雄の方を見て) まだ鯉と遊んでるの、あの方。

留雄 あなたのやうに飽きつぽくはありません。

ルイーズ あしたから見たいらつしやい。

留雄 あさつてになつたらわかります。

房子 なに、あしたとか、あさつてとか。

ルイーズ あしたから白川さんにポーズして頂くの。白川さんのお描きになるこつちの女が、みんなどこかしら日本の女になるんでせう。だから、あたしが、その逆に、日本人を描いて見ようと思ふの。あたしなら大丈夫、どこから見ても日本人つていふ日本人が描けると思ふわ。

房子 そりやねえ、日本人は顔の色が……。

ルイーズ いいえ、さうぢやないの。眼よ、大事なのは。

留雄 (小聲にて歌ひ出す)

Viens, tout est si doux.

Si plein de promesse !

.....

ルイーズ (その後をうけて)

Un sourire en très grands yeux

房子 (ルイーズと合唱)

Me révèle un coin des cieux

.....

手塚 (寫眞機を三人の方に向け、歌が終つてルイーズと房子とが正面を向きたる刹那を寫し撮り) ブラヴォオ!

房子 寫眞はこれから一人で撮りにいらつしやいね、どこへでも。

手塚 まあ、さう云ふな。ルイーズさんが来て下すつてよかつた。背景と完全に調和するんでね。

留雄 もう出かける。

手塚 (留雄に) 君、一寸そこをどいて下さい。(ルイーズも去らうとするのを止めて) いいえ、あなたはど

うぞそのまま。

ルイーズ (遠ざかりながら、房子に) あなた、いらつしやいよ。

房子 いや、あたし。

手塚 ぢや、白川君でもいいや。成る可く、そつちを向いて……さう、もつと、うつむいて。(寫す) よろしい。

留雄 僕の背中は、よほどフォトジェニックと見えるなあ。(一同笑ふ)
手塚 さ、行きませう。(先に立って歩き出す)

ルイズ あたし、喉がかわいた。(歩き出す)

手塚 ビールでもひっかけませう。

房子 留雄さん、いらつしやい。(ほかのものをやり過して、留雄に近づき) つまらないでせう。

第一場

ルイズのアトリエ。午後四時。

ルイズ かまはないわ。あたしはあなたの肖像を描いてるんぢやないから。さ、しばらくこつちを向いてて頂戴。

留雄 ぢや、誰の肖像です。ただ日本人の肖像だといふんでせう。地理の挿繪か。

ルイズ なんとでもおつしやい。

留雄 (皮肉に)「人間の魂の微妙な旋律」はいいな。

ルイズ なんですつて。

留雄 そんなにじろじろ見ないで下さい。僕の顔の中に、あなたのおつしやるやうな面白いものはありつこはないんだから。

ルイズ モデルは理窟を云はないのね。

問。

留雄 あなたは、日本人が好きだつて云ひましたね。

ルイズ (筆を止めます) それがどうしたの。

留雄 それでは、或る一人の日本人を、佛蘭西人と同じやうに愛することが出来ますか。

ルイズ (筆を止めて) 愛するつて、どんなに。

留雄 どんなにでも……、男として。

ルイズ (繪具を置きながら) それならば、あなた、何國人だからといふ問題ぢやなくなるわ。

留雄 さうでせう。寧ろ、何國人だから愛することが出来ないといふやうな場合があるでせう。

ルイズ さあ、そりやどうですかね。兎に角、日本人はあんまり西洋の女を好かないつていひ

ますわね。西洋の男が日本の女を好くほど……。

留雄 好き方にも色々あるでせうが。

ルイズ 西洋の男が日本の女に惹きつけられる理由は、男として、そんなに名譽にならないつて或る人が云つてますね。

留雄 その反對の場合。

ルイズ 日本の男が西洋の女を好かない理由。

留雄 それも、男の名譽にはならないわけですね。

ルイーズ (笑ひながら) まあ、さうでせうね。

留雄 こんどは、女の方から云つたらどうなるでせう。日本の女は西洋の男が……。

ルイーズ 好きらしくないわね。

留雄 近頃は、さうでもありませんよ。なかなか。

ルイーズ 駄目よ、西洋の男なんか。優しいやうでしつかりしてゐる日本の女が、なんだつて、女のご機嫌ばかり取つてるやうな男を……。理想が違ふんですからね。

留雄 そんなことはありませんよ。誰だつて踏みつけにされるよりは、ちやほやされた方がいいにきまつてゐる。

ルイーズ あたしは、さうは思はないわ。日本の男は、ほんたうに女の味方だと思ふの、ほんたうに女の愛し方を知つてゐるんぢやなくつて。日本の男は、薄くつて温かい服みたいなものね。外から見ると寒さうだけれど、それにくるまつてゐる本人は、結構、温かいんだから文句はないわ。

留雄 薄くつて暖かいなんていふことは例外ですよ。薄けれや大概寒いんだ。

ルイーズ 厚ぼつたくつて寒いよりは、軽いだけましだわ。

留雄 重いと暖かいやうな気がしますよ。

ルイーズ 長く着てゐられないから同じよ。

留雄 なんだ。

兩人笑ふ。

ルイーズ 然し、西洋の女が日本の男と結婚するのは考へものね。それも、日本の男つていふものが、ほんたうにわかつてゐれば別だけれど、さもないと、とんだ不幸な目に遭ふわね。その例がいくらかもあるわ。

留雄 そりや、さうですとも。殊に日本へ行つて暮しちやおしまひです。

ルイーズ ある人の書いた本に、それもなかなか日本をよく見てゐる人なのよ。その本にね、西洋に来てゐる日本の青年はみんな行儀がよくつて、物わかりが早く、控へ目で、親切で、辛抱強い。殊に、西洋の女が悦びさうな可愛らしいおみやげを、いつもポケットの中に忍ばせてゐて、たまには、絹糸の結び目をほどこく手品や、紙ぎれで動物の形をこしらへる藝當をやつて見せる、誠に頼母しい青年だ。が、決して油斷をしてはならないつて。(笑ひながら) ね、もうその先きはわかつてゐるでせう。

留雄 (苦笑しながら) わかつたやうな、わからないやうな……。

ルイーズ まあ、それはわかつたとして、あたしに云はせれば、日本の男のほんたうの値打は、西洋風の生活でなしに、やつぱり純日本式の生活をして、初めてわかるんだと思ふの。洋服よりも羽織袴、椅子よりも座蒲團、ステッキよりも扇子、握手よりもこのお辭儀。(頭を下げて見せる)

留雄 シルクハットよりもチョン髷。

ルイーゾ (眞面目に) さうよ。西洋人の眞似なんかして、どんなにあなた方は男ぶりを下げていらつしやるかわからないわ。

留雄 全く僕達は見つともないでせうね、あなた方の眼からご覧になると……。

ルイーゾ 見つともないよりも、お氣の毒だわ。

留雄 ひどいなあ。どうも然し、こればかりは……。

ルイーゾ そのなのよ。なにもわざわざ西洋くんたりまで来て、折角の男ぶりを下げなくつても、ちやんとお國にいらつしつて、お花さんや、お雪さんに……。

留雄 (相手の云ひ終らないうち) 眞面目な話は眞面目にしませう。

ルイーゾ (ベレットを置き、留雄を見る) 眞面目よ、あたし。(笑ひ出す) なんてしたつけれ、話の起りは。(考へて) さうさう、どうしてまた、あなた、そんなことを云ひ出したの。

留雄 そんなことつて。

ルイーゾ 西洋の女が、日本の男を愛することが出来るかつていふやうなこと……。

留雄 (ためらひながら) ちよつと、訊いて見ただけです。

ルイーゾ (意地わるく) あなたが、そんな問題にぶつかつてらつしやるんぢやないのね。

留雄 實は、ぶつかりさうなんです。

ルイーゾ あら、さうなの。で、相手の方の心持を疑つていらつしやるのね。

留雄 まだ疑ふところまでも行つてないんです。

ルイーゾ ぢや、その方には、あなたの心持はわかつてるの。

留雄 さあ、どうですか。わかつてゐるだらうと思ふんですが。もちろん、さういふ話にはまだ

觸れずにあるんです。

ルイーゾ ぢや、いつまでたつたつて、わかりつこないわ。

留雄 さうでせうかね。大概さういふ場合には、どちらかで、もう大丈夫だといふ時機を發見するものだと思いますがね。

ルイーゾ どちらかでつて……兩方とも、同じ心持でゐればね。それはさうね。ぢや、まだその時機が來ないんでせう。

留雄 そんな時機は、永久に來ないんぢやないかと思ふんです。

ルイーゾ (再び畫布に向ふ。落着かぬ様子)

留雄 またはじめるんですか。(立ちかけて) 僕はもういいでせう。

ルイーゾ どうして。もう少し……ね。

留雄 (腰をおろす)

ルイーゾ (それとなく留雄の方を盗み見ながら) 相手の方はどんな方。

留雄 (探るやうに) それはまだ云へません。

ルイーゾ いいぢやないの。あたしに隠さなくつたつて……。

留雄 あなたにだから隠すんです。

ルイーザ (笑ひながら) まあ、あたし、そんなに信用がないのかしら。(問) その方とどうしてお近づきにおなりになつたの。

留雄 友達のうちで……。

ルイーザ お友達つて、日本の方。それとも……。

留雄 そんなこと、どうでもいいぢやありませんか。

ルイーザ あたしも知つてるうち。

留雄 多分。

ルイーザ 手塚さんとかぢやないのね。

留雄 さうです。

ルイーザ あら、手塚さんとかなの。あそこへ来る娘さんで……。あたし、會つたことがあるかしら……その方。

しら……その方。

留雄 それは、どうか知りません。僕が行くときには、その人か、あなたか、どつちか一人にしか會はないから。

ルイーザ (強ひて笑ふまいとして) 變だわね。あたしもよく行くんだけど。

留雄 何がそんなにをかしいんです。だからあなたには云ひたくないんだ。

ルイーザ 笑つちやいけないの。ぢや、眞面目。(問) あなた、その方をほんとに愛していらつしやるの。

留雄 僕は一つしか愛し方を知りません。

ルイーザ 一度しか愛することが出来ないつておつしやらないわ。

留雄 それはどういふことです。一度愛を失つた人間が、他に愛を求めることは許されないんですか。

ルイーザ そんなむづかしいことぢやないの。

留雄 (起ち上り、ルイーザに近づく) ルイーザさん。あなたに是非お尋ねしたいことがあるんですけど……。

ルイーザ (いくらか平靜を失つて) なあに、そのことで。(筆を止める)

留雄 今、假に、あなたが、日本の男から、直接にかういふ話を持ち出されたらどうします。どう思ひます。

ルイーザ (驚いたやうに) あたしが。

留雄 そうら、そんなにびつくりなさるぢやありませんか。

ルイーザ だつて、だしぬけにそんなことを聞いたつて。

留雄 だから同じことです。その人にしても、僕がだし抜けに、こんなことを云ひ出したら、きつとびつくりするに違ひありません。それだけでも、二人の間に大きな障壁があるんです。

(問) これが若し、佛蘭西人の口からだつたら、なんでもないことぢやありませんか。或る感動は興へるにしても、意外でも、不思議でもない戀愛の告白ぢやありませんか。

ルイーズ それは違ふわ。(間) 氣にも留めてないやうな男の口から……。

留雄 氣にも留めてない。その女がですか。

ルイーズ その方といふわけぢやないのよ。(間) あなたの尋ね方がわるいんだわ。(無心に繪を見つめてゐる)

留雄 (せき込んで) ぢや、どうお尋ねすればいいんです。

ルイーズ (笑ひながら) どんなことが訊きたいの、あなたは……。

留雄 (少しじれて) もういいんです。わかりました。(ルイーズから離れて、長椅子に腰をかける)

ルイーズ (パレットを置き) 何がわかつたの、をかしな方。(留雄と並んで掛ける)

長い沈黙。

留雄 ルイーズさん、僕は駄目です。どうか察して下さい。あなたがおつしやるやうに、まだその時機ではないかもしれませんが。然し、もう黙つてはゐられないんです。黙つてゐるのが、云ひ出すのと同じくらゐ、いや、それ以上恐ろしいやうな氣がするんです。どうせ望みがなにもものなら、それを早く知つて、永久に來ないものを待つ苦しさから遁れたいんです。望みを失ふ悲しみは、どんなに大きくなつても、大きければ大きい程、自分を強くするものです。自分を支配する力を與へてくれます。このままでは、自分の存在を否定することさへ出來ないのです。

ルイーズ あなたは随分取越苦勞をなさる方ね。その方だつて、はつきりご自分の心持が、わか

つてゐないかもしれないぢやありませんか。あなたが、今、たつてそれを知らうとなさるのは、どんなものでせう。

留雄 そんならそれでいいのです。それだけのことでわかれば、僕は満足します。(次第に暗やか

な面持になる) ルイーズさん、あの人は、僕を少しでも愛してくれてゐるでせうか。

ルイーズ まあ、そんなこと、あたしに訊いたつて……。

留雄 (返事を待たないで) 愛してくれることがあるでせうか。(留雄、ルイーズに近づく)

ルイーズ そんなことがわかるもんですか。

いきなり起ち上り、呼鈴を押す。

女中 (現る)

ルイーズ 帽子屋へは行つてくれた。

女中 はい、あの……四時までには、是非お届けするつて申しましたんですけれど……。

ルイーズ (時計を見て) だつて、もう四時よ。

女中 ほんとに、どうして……。

ルイーズ ご苦勞だけれど、もう一度催促して来てくれない。

女中 畏こまりました。一方だけでも出來てをりましたら、わたくしが貰つて参りませうか。

ルイーズ さうね。さうしておくれ。白い羽根の附いたのが、急ぐんだけれど……。でも、少しくらゐなら待つて、兩方とも貰つておいでよ。もう一度くらべて見ないと、……(留雄の方

を見て、媚びのある笑ひ方をする

女中 さう致しませう。

ルイーズ (留雄に) あなた、お茶はいらない。

留雄 いりません。(晝架に近づき、繪を見る)

ルイーズ (女中に) ぢや、大急ぎでね。

女中 はい。(退場)

長い沈黙。

ルイーズ なにしていらつしやるの、そんなところで。

留雄 繪を見るんです。(浮かぬ調子)

ルイーズ (快活に) どう。

留雄 どうつて、別に……。

ルイーズ お氣に入らない。

留雄 僕の氣に入る必要はないでせう。

ルイーズ (いくらか氣まづげに) もちろん。

留雄 (垂直に、而し、氣がとがめるらしく) しかし、繪としては、なかなか面白い。

ルイーズ いいのよ、そんな褒め方をして下さらなくつても。

留雄 でも、實際なんだから……。

玄關で、呼鈴が鳴る。續いて小走りに廊下を傳ふ足音。

女中の聲 あら、今、あたしが行かうと思つてゐたとこなの。お嬢様がそりやお待ち兼ね……さ

つきからお出ましのお支度をすつかりなすつて……ぢや、兩方ともね、それでよかつた。ち

よつと待つて頂戴。

ルイーズ (起ち上り、戸口に近づき) ご免なさい。すぐ来るから……。(出で去る)

留雄 どうぞ。(空想に微笑みながら、室内を歩きまはる)

長い間。

ルイーズ (髪を手で押へながら入り来る) どうも失禮。

留雄 ちつとも。そろそろ出かけなくつてもいいんですか。

ルイーズ まだ早いわ。歩いたつてぢきなんですもの、ここから。今日はどんな人が來てるかし

らん。

留雄 僕は、あの人が來ると思ひます。まあ一度、見て下さい。僕がこれほど想つてゐる相手が、
どんな人か、あなたに是非知つて頂きたいんです。

ルイーズ (笑ひを抑へて) 綺麗な方。

留雄 あなたのやうに。(溜息)

ルイーズ (天井を見たまま) 髪は。

留雄 ブロンド。

ルイーズ (眼をつぶつて) 眼は。

留雄 (ルイーズの方につめ寄り) 空色、どうかすると紫。(ルイーズの手を取らうとする)

ルイーズ (静かに起ち上り) 聲は。

留雄 (慌てて) 聲。聲はね……(苦しまぎれに) 銀の鈴。(かう云つて頭をかゝへる)

ルイーズ オホ、、、、、あなたもなかなか話せるわね。(戸口に近づき) 待つて頂戴、支度をす
るから。(出で去らうとする)

留雄 ルイーズさん。

ルイーズ (振り返つて) なあに。

留雄 その人はね、僕を愛してゐてくれるなら、きつと、今日、あそこへ、白い羽根のついた帽
子を冠つて來ます。

ルイーズ (ギョツとして) 白い羽根のついた帽子。(戯談のやうに) そんなことわかるもんですか。(急
ぎ去る)

留雄 (ぼんやり考へ込む)

問。

女中 (笑ひながら入り来る) あの、お嬢様は、少し、お支度に手間がお取れになるさうでございま
すから、すみませんが一足お先きへどうぞ……。

留雄 (驚いて) 一緒に出かけることになつてゐるんです。

女中 はい、それはもう。ただ、あんまり長くお待ちさせるのもつておつしやいますんで……。
留雄 ようござんす、いくらでもお待ちしますつて、さう云つて下さい。どうぞ、ごゆつくりつ
て……。

女中 (しかたがなしに去る)

留雄 (満足げに笑ふ)

女中 (再び現はれ) 甚だ失禮でございませけれども、あの、捜しものをなすつていらつしやいま
すから、それが出ませんうちは……。

留雄 出るまで待ちます。

女中 (當惑さうに) でも……。

留雄 出るまで待ちますよ。どうせ出ないものぢやないんでせう。

女中 それはさうでございませけれども……。

留雄 ちよつと、お嬢さんにお顔をお見せ下さいつて、さう云つて下さい。お話があるからつて
……。

女中 (笑ひながら去る)

留雄 子供だなあ。

女中 (手で顔を押へながら入り来る) 只今、お召替への最中で、當分、こちらへはおいでになれませ
んさうでございます。

留雄 捜しものは出なんですか。

女中 さあ、どうぞでございますか。伺つて参りませうか。

留雄 いいんですよ。(思ひ切つて) ぢや、僕は歸ります。お嬢さんにね、僕は歸りますつて云つて

下さい。(女中の方に近づき、小聲で何か云はうとして、それをやめ、出口に近づく)

ルイーズの聲 何をぐづぐづしてるの。早く行かないと遅くなつてよ。

留雄 (努めて平氣に) ぢや、向うでお待ちしてゐます。(退場)

女中 (胸を撫で下ろし、靜かに戸を閉める)

第二場

手塚の家の應接間。

房子 (獨りで本を讀んでゐる。時々、戸口の方に眼をやる)

留雄 (女中に案内されて入り来る) おや、まだだれも來ないんですか。

房子 (起ち上り) 今日はどなたもいらつしやらないかと思つてましたの。ようこそ。

留雄 先達は失禮。

房子 わたくしこそ。(改まつた調子に氣がついて笑ふ)

留雄 手塚君は。

房子 (留雄に椅子をすすめながら) 今朝、歸つて参りましたの。今、ちよつと役所へ顔を出して來る

つて出かけましたが、もう戻つて來る頃なんですよ。

留雄 ルイーズさんも後から來るさうです。

房子 今日もお會ひになりました。

留雄 毎日會つてます。

房子 ほんとにさうでしたわね。お仕事は進みますか。

留雄 こつちの仕事は一向進みません。近頃は、モデルが専門で……。

房子 あたしも誰かモデルに使つてくれないかしら。

留雄 いい畫家のモデルにならなくてもようござんすね。

房子 あなたならいいわ。(かう云つて、あわてて) モデルも樂な商賣ぢやなささうね。

留雄 苟も外交官夫人が、へつぽこ畫家のモデルになつたとあつてはね。

房子 さういへば、外交官のところなんか、こりごりだわ。

留雄 一度で澤山ですか。

房子 まあ、ひどい。(間) ああ、さうさう、お妹さんからのお手紙をお目にかけてませうね。(起ち

上る)

留雄 (腰を浮かせて、半ば戯談の如く) ぢや、僕は歸ります。

房子 どうして。いけないの。あなた、ほんとに見たくないの。(責めるやうに留雄の顔を見つめる)

留雄 許して下さい。僕は年寄りが可哀想だと思ひます。然し、それは、どうすることも出来な
 いんです。僕は、過ぎ去つたことを一切忘れてしまふために、また、これからつまらないこ
 とで内輪もめを起さないやうに、こんな放浪生活をしてゐるんです。日本に歸つて、おやぢ
 と顔をつき合せてゐたら、きつと双方で面白くないことがあるに違ひありません。そればか
 りでなく、僕の周囲には、誰一人僕の氣持がわかつてくれるものがないんです。僕のするこ
 とはなんでもじやまをしようとかかつてゐるんです。そこへ行くと、外國にゐれば自由が利
 きます。人が自分に注意してゐないといふことは、それほど苦しいことぢやありません。

房子 外國でなら……あなたはさうおつしやるけれど、佛蘭西なら佛蘭西にいらつして、こつち
 の習慣になれておしまひになつたところ、ほんたうの幸福が、ここで求められるか
 どうか、それはなんだか當てにならないやうな氣がしますわね。早い話が、いつぞや、あな
 たは、もう外國人の家へ行くのがいやになつたつておつしやつたでせう。

留雄 さういふ外國人の家もあると云つただけです。

房子 それから、第一に、町やなんかでキョロキョロ顔を見られるのが、いやだつておつしやら
 なかつた。

留雄 さういふ場合もあると云つただけです。

房子 あなたが、いつか、日本人の悪口を、さんざん聞かせて下すつた時に、あたしが、戯談半
 分に、それぢや、なぜ、そんなにお嫌ひな日本人の家へなんぞいらつしやるんですつて、さ

う伺つたら、あなたは、かうおつしやつたわ。それは、好奇心の満足とお世辭の安賣を、唯

一の接待法と心得てゐる、外國人の家よりもましたつて……。(笑ふ)

留雄 僕がそんなことを云ひましたか。(笑ふ)

房子 ええ、おつしやつてよ。だから、あたしが、それでは、やつぱり、日本人がましなのねえ
 つて云ふと、日本人の家だから来るんぢやない、自分を外國人扱ひにしない人間の家だから
 だつて。そんな苦しい理由があるもんですか。(笑ふ)

留雄 全くさうなんだから……。

房子 そんな瘦我慢はおよしになつた方がいいわ。

留雄 そりやもちろん、手塚君とあなたとお二人で作つてをられる或る特殊な雰圍氣、手塚君か
 らだけでもなく、あなたからだけでもなく、僕の氣持に觸れて来る或る温かい感じが、この
 家の中にあつて、それが僕には懐かしいといふ理由もあります。あなた方お二人が、この部
 屋の中で靜かに話をしておいでになる……それを僕が、どこか隅の方で、黙つて聞いてゐる、
 といふよりも、それを感じてゐれば、それでもう、のどかな氣持になれるのです。かういふ
 氣持は、あなたにわかるかしら。

房子 そりやわかるわ。つまり、あなたの生活に、どこか缺けた所があるのね。一口に云へば、
 物足らないんでせう。淋しいつて云つちやいけないかもしれないけれど。

留雄 その缺けてゐるものは、なんだと思ひます。なぜ物足らないんでせう。(問)僕はしたいこ

とをしてゐるんです。したいと思ふことで、出来ないことはないんだけど……。

房子

(相手の不誠實を責めるやうに、また、その高慢さを憐れむやうに、黙つて、留雄を見据ゑてゐる)

留雄

(相手の視線を避けるやうに) わかつた。あなたは、僕の生活に温か味が缺けてゐるとおつしやるんでせう。

房子

温か味ね。それから落ち着き。

留雄

落ち着きがね。(考へ込む。何か思ひ出したやうに、あらはではないが、それはしはじめた) 然し、生活といふものが、そんなに落ち着いたものぢやないんでせう。戦ひだとも云へ、お祭りだとも云へるんぢやないんですか。

房子

そりやさうだわ。だから、なほ、落ち着いて、疲れたからだ、と魂とを、休めることが必要なんぢやなくつて。あなたは、戦ひとお祭に疲れていらつしやるんだわ。

留雄

ぢや、どうすれば、その落ち着きが得られるんです。

房子

そんなことは、あたしが云はなくつたつてわかるでせう。

留雄

わかるやうな氣もします。

稍長い沈黙。

房子

温かい心に觸れて、それを、温かいと感じることが出来ないやうになれば、もうおしまひよ。

長い間。

留雄

僕は、まだ、望みがありますか。

房子

そろそろあぶないわね。(淋しく笑ふ)

呼鈴が鳴る。

留雄

(思はず起ち上り、戸口の方を見る)

房子

歸つたやうだわ。

手塚

(慌だしく入り来る。) や、失敬。君一人。(房子に) 今日はまだ晩飯に呼ばれちやつてね。お前も一緒につていふことだつたが、(一寸留雄の方を見て) もう遅いから困るか。

房子

どなた。

手塚

なに、大使さ。僕は留守のつもりで、横田夫婦を入れてあつたのが、また細君が急病でね、お鉢の逆戻りさ。僕一人なら、誰かもう一人都合するつて云ふから、今日はやめてもいいよ。

房子

さう、ぢややめるわ。(留雄の方を見て笑ふ。手塚に) あなた、それで、もうすぐお出かけ。

手塚

うん、だつて返事をしなくつちや。まあ、もう少し話して行くか。(腰を卸るす) 房さん、白川君に夕食でも何したらどうだ。

留雄

いいえ、僕はすぐお暇します。

手塚

まあ、いいぢやありませんか。僕もおつき合ひが出来るといいんだけど……。

房子

(手塚に) ルイーズさんもいらつしやるさうだから、(留雄に) お差支がなかつたらあの方も一緒に、ね。

手塚 さうか、それや丁度いい。

留雄 まあ、先生が来てからのことにしませう。

房子 さういへば随分遅いわね。いらつしやり方が。

留雄 (無言のまま時計を出して見る)

手塚 (思ひ出したやうに) 君はご存じでせう、西村といふ繪かき。

留雄 知つてます。どうして。

手塚 (事もなげに) なに、今日役所へ警察から問ひ合はせに來たんですがね。なんでも、女を毆つ

たとか、蹴つたとかで調べられてゐるらしいんです。そんな人ですか。

房子 まあ。

留雄 そんな人かどうか知りませんが……。怪我でもさせたんですか。

手塚 顔がはづれたつて云ふんだから、まあ問題にはなりませんね。

房子 ひどいことをしたのね。

留雄 勇敢だなあ、先生。

房子 ちつとも勇敢ぢやないわ。

留雄 勇敢ですよ。毛唐になら、唾をひっかけられても黙つてゐさうな手合が多いんだから……。

問。

房子 でも、相手が女なんですもの。

手塚 言葉が通じないんで困つて云つてました。まだ來たてと見えますね。

留雄 一年位にはなるんでせう。さうだなあ。うまく云ひ開きが出来るかしら。誰か通辯に行つ

たんですか。

手塚 役所の方ぢや、そんなことを一々かまつてゐられませんかからね、どうかなるでせう。それ

に、相手の女が女だし、うつかり手出しをすると巻きぞへをくひますしね。まあ、さういふ

事件には、あんまり關係しないことにしてゐるんです。迷惑ですよ。

房子 迷惑なんですつて。(留雄の方を見て笑ふ)

留雄 僕なんかも迷惑をかけさうだな。

房子 どうして。

手塚 こつちへ來て、日本人の體面にかかはるやうなことをしてくれとね、それが一番困るん

です、われわれが。

房子 それやほんとな。だけど、日本人の體面も、いい加減なものよ。一とかど立派な日本人の

つもりでゐる人が、一も西洋、二も西洋なんですからね。そのくせ、それが、取つて附けの

西洋で、随分滑稽なすまし方をしてゐるんですもの。

手塚 お前にそれがわかるか。

房子 あたしにわかるくらゐだから、こつちの人が見たら、とても……。

手塚 然し、そんなことは大した問題ぢやないさ。

房子 問題よ。西洋人の前に出ると、先づどうしたら相手に笑はれないで済むかつていふ心配で、胸をわくわくさせてゐるんでせう。まるで、自然な所がなくなつてゐるの。笑はれまいと努めれば努めるほど、ぎごちなくなるのはあたり前だわ。(間)この人なんか、それがひどいんですからね。

手塚 (まごついて) 馬鹿云へ。

留雄 (笑ひながら) そこへ行くと、日本の女は得だなあ。

房子 なあぜ。

留雄 自分のもを自分のものとして、どこへ行つても発表が出来、それがそのまま、完成された生活様式になつてゐるんですからね。これに反して、日本の男は、完全に西洋人の眞似も出来ず、さうかと云つて、固有の生活様式からも遠ざかつてゐるんだから、どつちにしても、殺風景なわけです。全然日本風に洗煉された女はあつても、全然日本風に洗煉された男は、今時まづないと云つてもいいでせう。それだけ日本の男は、今、非藝術的な活き方をしてゐるんです。

房子 そりや、女だつて大部分は、調和も統一もない生活をしてゐますけれど、あたしの云ふのは、西洋人の前だからつて、何もびくびくしたり、まごまごしたりする必要はないつて云ふことなの。

手塚 なるほど、お前の云ふことも尤もだ。黙つて小さくなつてゐれば、それで済まないことも

ないんだらうがね。(房子の方をチラリと見、復讐的な笑ひ方をする)

房子 その方がよつほどましよ。

手塚 さうかもしれない。(戸口の方を振り返つて) 誰か来たやうだぜ。

房子 ルーズさんよ。

長い沈黙。

女中 (茶器を運び来り) あの、マドムアゼル・モオプレからのお使ひで、お嬢様は、今日急にお差支が出来まして、こちらへ伺へませんから、どうか皆様によろしくつて、さうお断りでございますました……。

留雄 差支が出来たんですつて、ただそれだけ。

女中 はい。それだけでございます。

留雄 うまいこと云つてら……。

房子 どうしたの。

留雄 人を馬鹿にするもんぢやありませんつて……。 (間) あ、僕がさう云はう、女中さんでせう。(起ち上る)

女中 はい。でも、もう歸りましてございます。

留雄 さうですか。ぢや、仕方がない。

房子 およしなさいよ、そんなこと云ふのは。差支は差支よ。(女中に) いいわ。

女中 (退場)

留雄 氣まぐれだなあ。

房子 さうとばかり云へないわ。あなたもわからない方ね。

手塚 (房子に) お前の方がわからないのかもしれないぜ。白川君の待ち方は、お前の待ち方と違ふんだらう。

房子 ほんと。(留雄の方に笑ひかける)

留雄 (笑ひながら) 来ると云つて来ない法があるもんですか。

房子 行くと云つて行けない時があるわ。

留雄 ありません。来ようと思つたら、どうしても来られる筈です。

房子 ここへ来ることより以上に、あの方を惹きつける何かがあれば仕方がないぢやありませんか。(留雄の心を探るやうにその顔を見据ゑる)

留雄 そりやさうだけれど……。

手塚 それぢや濟まない譯があるんでせう。

房子 (留雄に) そんな譯なんかあるものですか。

留雄 あるかもしれませんよ。(さりげなく笑ふ)

手塚 さあ、それやまあ、あるとしておいて、僕はぼつぼつ出かけます。

房子 あなた、それでいいの。

手塚 いいんだ。ぢや、ごゆつくり。(立ち上る)

留雄 いや、僕もそろそろ……。(立ち上る)

房子 あなたちよつと待つて頂戴、お話があるから、ね。(立ち上る)

留雄 急ぐお話。

房子 ええ。

留雄 (黙つて立つてゐる)

手塚 (種やかに) 用事のある人を無闇に引留めるんぢやないぜ、いくら淋しくつたつて……。

房子 (笑ひながら) ええ、わかつてよ。

手塚 いづれまた、そのうち。(退場)

房子 (手塚と共に退場)

留雄 (待ち遠しきうに室内を歩きまはる)

房子 (いそいそと入り来り) 留雄さん、ほんとにまだいいんでせう。ご飯を召上つていらつしやいね。

留雄 駄目です、今日は。このつぎにして下さい。

房子 (留雄の傍に寄り添ひ、しんみりと) どうして。(間) あたし、今日は、ゆつくりあなたに聞いて頂

きたいことがあるんだけれど……。

留雄 ゆつくり。ぢや、それもこのつぎにして頂けませんか。今夜は、どうしても行かなければならないところがあるんです。

房子 今夜何時から。

留雄 今、すぐ。

房子 (しばらく留雄の顔を見つめ、訴へるやうに) ぢや、もう一時間。ね、後生だから。

留雄 一時間。(間) 一時間ならよござんす。(着席)

房子 うれしい。(留雄に近く座を占める)

長い沈黙。

留雄 どうしたんです。

房子 あたし、手塚と別れようと思ひますの。

留雄 (驚いて) 手塚君と。(間) 理由は。

房子 理由。あたし、あの人を愛することが出来ないから。

留雄 それで。

房子 それで……(間) 獨りで日本へ歸らうと思ひますの。

留雄 日本へ。(間) さうして、どうなさるんです。

房子 (低く) どうするかわかりません。(間) どうにかかりますわ。

留雄 手塚君はあなたを愛してゐるんでせう。

房子 愛してゐるつもりでせう。

留雄 つもりとは。

房子 あの人から愛されてゐることが、あたしには苦痛なの。恥しいとさへ思ふわ。

留雄 さういふことがあるでせうね。然し、手塚君が可哀想だとは思ひませんか。

房子 可哀想なやうな氣もするんですの。

留雄 (暫く考へた後) あなたが、さういふ決心をなさるについて、別段僕の意見をお求めになるわけではないでせう。

房子 (相手の心持を読みかねて) 伺つておきますわ。

留雄 さうぢやないんです。僕は、あなたの一身上の問題に喙を容れる資格はないんです。若し

意見を求められれば、自分の考へだけは云ひますけれど。

稍長き沈黙。

房子 かういふ問題はもともと理論外ですからね。(間) 直接この問題についてでなく、もつと將來の問題で、あなたのご意見を承りたいとは思つてゐるんですの。

留雄 手塚君と別れてから後のことですか。

房子 ええ。

長い沈黙。

留雄 將來の問題といふと、生活問題ですか。

房子 (急に調子をかへて、快活に) まあ、それは今日でなくつていいのよ。今はただ、このことをお

耳に入れておくだけ。ね、びつくりなすつた。

留雄 別にびつくりもしません。僕は夫婦関係といふものを、随分あやふやなものだと思つてゐるんですから、大かたはね。

房子 ほんとに、あやふやなものよ。(問。唇を噛む)

留雄 なるほど、むづかしいもんだなあ。

房子 なに、結婚。

留雄 結婚でも、戀愛でもね。

房子 むづかしいんじゃないわ。運よ。

長い沈黙。

留雄 運か。

房子 あなた西洋の女をどうお思ひになつて。

留雄 どうとは。

房子 女として。(問)男は幸福でせうか。

留雄 男によりますね。

房子 女にもよるでせうけれど……。(笑ふ)

留雄 だから、そんなことは一概に云へませんね。

房子 ぢや、男はあなたとして、典型的な西洋の女はどう。もつと限つて、佛蘭西の女。その女が、あなたを愛するとしたら、どんな愛し方をするでせう。その愛し方に、あなたは満足な

される。

留雄 つまり、西洋の女が一般に有つてゐる戀愛觀念に、僕が同感出来るかどうかと仰しやるんですね。

房子 さうよ。

留雄 出来さうですね。あなたは例外かもしれないが、僕は日本の女の大部分が考へてゐるやうに、男の爲なら、どんなことでもするといつたやうな愛し方を、そんなに尊いものだとは思つてゐません。

房子 「愛する男の爲になら」でなければ駄目だわ。さういふ心持ならいいんでせう。

留雄 その「どんなことでもする」が、いけないんです。

房子 どうして。

留雄 與へるといふ態度は戀愛には禁物です。欲しいものを與へられる前に、相手から思ふままつかみ取るんでなければ戀愛の陶醉境にははひれないんです。與へたいものを與へる前に、相手がそれをつかみ取りに来なければ、相手の愛は完全でない。まあ、さう見ても差支ないでせう。

房子 (痛ましげに留雄の顔を見つめる)

留雄 お互にしたいことをして、それが偶然に相互の氣に入るやうな、さういふ二人だけが、ほんたうに愛し合つてゐるんです。

房子 そんなうまいことがあるもんですか。

留雄 だから、めったに戀は出来ないんです。

房子 お互に望んでゐるものを、進んで與へ合ふ、それでも立派に愛が成り立つと思ふわ。與へることが、與へられるのと同じ悦びなんだから……。

留雄 戀愛は宗教でも道徳でもありません。與へることが相手を悦ばすと思ふのは、人間の本性を無視した考へ方です。そこに投げ出されたものを、與へられたものだと思ふ人間があれば、僕はその人間を馬鹿だと云ひます。

稍長い沈黙。

房子 あたし、實を云ふと、あなたはお氣の毒な方だと思つてゐましたの。それが、なぜだか、急に、あなたが羨ましいやうな氣がして來ましたわ。

留雄 (いくらか、たじろいて) さうですか。

房子 ぢや、日本の女を愛するなんていふことは、とてもあなたにはお出來にならないわね。

留雄 (笑ひながら) それやどうだかわかりません。現に、僕は日本の女を熱烈に愛したことがあります、六七年前に。

房子 (顔を伏せて) 知つてますわ。然し、それは昔のこととせう。(問) その女は、あなたの愛に背いた冷酷な女でした。その頃のあなたは、また、相手から與へられるまで、それを待つておいでになるあなたでしたわね。(淋しく笑ふ) あなたから愛されてゐることをはつきり感じなが

ら、その女は、それに酬いる方法さへ知らなかつたんですもの。(長い沈黙)

留雄 (靜かに起ち上つて窓ぎはに近づく)

房子 その女は、あなたのお口から、ただの一度も、期待してゐた言葉を聞かされないうちに、氣まぐれな運命の手に渡はれて行きました。(そつと涙をふく)

留雄 房子さん、もうその話はよして下さい。僕達の友情は、もつと以前の、もつと楽しい思ひ出で繋がつてゐるんぢやありませんか。(問) あれは何時頃のことだつたか、僕がブランコから落ちて額に怪我をした時、そばで、風船をついて遊んでゐたあなたが、あわてて、その紙の風船で、僕の額を押へながら、「お馬鹿さんねえ」かう云つて、僕をうちへ連れて行つて下さつたのを覚えておいでですか。今のあなたは、その頃のあなたなんです。僕にとつて……。ね、さうでせう。

房子 いいえ、違ひます。その頃のあたしは、どんなことでも平氣であなたに云へたのが、今のあたしは、思つてゐることの半分も、あなたに云へなくなつてゐるんですもの。

留雄 それや、人間が年を取れば、分別といふ變なやつが、心臓の鍵を握るやうになりますからね、お互に。

重苦しい沈黙。

房子 (溜息をついて) 分別ばかりぢやないのね。

留雄 (笑ひながら) 分別顔した無分別と云ふ奴もありますね。僕なんかには、大分それがありさう

です。

房子 ほんとよ。

留雄 あなたにどうしてそれがわかります。

房子 (しみじみと) しばらくの間に、随分あなたも變つておしまひになつたわね。

留雄 どう變つたんです。(房子に近づく)

房子 どうつて、そりや、もとからさうだとおつしやればそれまでだけれど、なんだか、あなた

とお話をしてゐると、あたしの云ふことが、いちいち的から外れるやうな氣がしますの。

(間) また、實際、外れてしまふんですわ。(笑ひながら) よくねらつたつもりでも……。

留雄 そりや困りましたね。(間。聲をおとして) その的とはなんです。

房子 なんに限らずですわ。

留雄 例へば……。

房子 例へば……(間) 例へば……(抑へきれないものをうつちやるやうに) 留雄さん、お願いだからあた

しをそんなにいぢめないで頂戴。ええ、あたしが馬鹿なの、こんなことを云ひ出すなんて

……。でも、あなたはあたしの苦しい告白をもつと素直に聞いて下さるだらうと思つたんで

す。(泣きながら) あたしはどうしたらいいんでせう。(両手で顔を覆ふ)

留雄 (房子の肩に手をかけ) もつと早くあなたに云つておけばよかつた。僕は、或る女を愛してゐる

のです。

房子 (極く低く) ルイーズさんでせう。

留雄 その愛は遂げられない愛かも知りません。あの人から愛の保證を得ることさへまだ出来

ずにゐるのです。然し、僕の心は囚はれてゐます。あなたが僕を想つてゐて下さる、さう知

つて、心が……亂れはしても、僕はあなたから差し延べられた手を……すぐ取ることが出来

ない。それはわかつて下さるでせうね。

房子 (黙つて肯く。長い沈黙)

留雄 話をわき道にそらさうとした僕の態度は、たしかに卑怯でした。僕の取るべき道を教へて

下さい。

房子 (淋しく笑ひながら) いいのよ。そんなこと。あたしにかまはないで、あなたはあなたの道をお

歩きなさい。ぢや、今日はこれでお別れしますわ。(靜かに起ち上り) あなたが昔お苦し

になつただけ、あたしも苦しみますわ。(戸を開ける)

留雄 (頭を垂れ、力なく退場)

房子 (送つて出ながら) やつぱり、毎週金曜日には、いらしつて下さいね。(やがて、両手にて顔をおほひ、

入り來り、急いでビヤノを開け、靜かにセレナタを弾く)

第三場

前場と同じ場面。

ルイーズ (白い羽根のついた帽子。いくらか落ちつかぬ様子にて) ぢや、使が来てからすぐね、白川さんのおかへりになつたのは。

女中 すぐでもございませんでした、旦那様がお出かけになつてからも、しばらく奥様とお話をなすつていらつしやいましたから。

ルイーズ おや、さう。(問) 使をよこした時、白川さんはなんとか云つてらつしやらなかつた。

女中 (笑ひながら) いいえ、別になんとも。

ルイーズ (信じないやうに) 怒つてらしたでせう。(軽く笑ふ) ぢや、奥さんにさうおつしやつて頂戴ね。すぐお暇しますからつて。(傍の椅子にかける)

女中 はい、畏こまりました。(退場)

房子 (靜かに扉を開き、強ひて笑顔を作りながら、ルイーズの方に近づく)

ルイーズ (立ち上り) 今日は。

房子 (日本風に會釋して) いらつしやいませ。もう、ご用はお済みになりましたの。(ルイーズに椅子をすゝめ、自分もかける)

ルイーズ ええ。今日はもう遅いからと思ひましたけれど……(問) まだ、どなたかいらつしやるかと思つて……。

房子 白川さんは、たつた今、お歸りになりましたわ。

ルイーズ さうですつてね。お約束をしないと、すまなかつたけれど……。これからどこへいらつしやるつていふやうなことを、おつしやつてませんでしたか。

房子 いいえ、伺ひませんでした。

ルイーズ 今日どなたか珍しい方がお見えになりましたの。

房子 いいえ、どなたも。

稍長い沈黙。

ルイーズ 先達はどうもありがたう。おかげで愉快な日を過しましたわ。

房子 却つてご迷惑だつたでせう、暑くつて。

ルイーズ あ、それから、あの時の寫眞、わざわざ。お上手ですわ、ほんとに。

房子 なんですか、あんなことばかりに凝つて……。

稍長い沈黙。

ルイーズ あなた、白川さんのおうちの方とも、ご懇意になすつていらつしやるんでせう。

房子 ええ、ずつと以前から。

ルイーズ お父様は宮内省とかに勤めていらつしやるんですつてね。

房子 お家柄なんですの、なかなか。

ルイーズ まあ、ぢや、立派なお暮しをなすつていらつしやるのね、おうちでは。

房子 さうですとも。

ルイーズ お父さまと、仲たがひをしていらつしやるつていふぢやありませんか。

房子 仲たがひつていふわけぢやないんでせう。詳しいことはなんですけれど、やつぱりあの方がおうちの相續はなざるんでせうから。

ルイーズ ご長男ですわね。

房子 さうですよ。

ルイーズ おうちのこととはちつともおつしやらないのね、あの方。

房子 お身分を鼻にかけるやうな方ぢやありませんわ。

ルイーズ ええ、そりやわかつてますわ。(間)さうですか。

稍長い沈黙。次第に暗くなる。

ルイーズ 變なことを伺ふやうですけど、白川さんはまだお一人なんでせうね。

房子 え。

ルイーズ いいえね、お國の方に奥さんでもいらつしやるんぢやないかと思つて……。そんなことはありませんわね。

房子 さあ、(長い間)あたしはただ、あの方が結婚していらつしやらないことは知つてゐます。

ルイーズ とおつしやると……。

房子 そのことなんでせう、お訊ねになつたのは。

ルイーズ ええ、さうですの。

間。

房子 立派な方ですわ、白川さんは。

長い沈黙。

ルイーズ 何かあの方がおつしやつたんでせう、あたしのことについて。

房子 あなたを愛しておいでになるつていふことだけ……(聲がかすかにふるへる)

ルイーズ まあ、今日。

房子 いいえ、もうずつと前のことですわ、そのお話があつたのは。(ルイーズの方に近づく)あの方は、あなたから早くいいお返事を聞きたがつていらつしやるんですわ。

房子、そつと電燈をつける。ルイーズの夢みるやうな眼を、房子は悩ましげな眼で見据ゑてゐる。二人は急に笑顔を作る。

ルイーズ びつくりした。

房子 暗い方がよござんしたわね。

第四場

サヅワ地方。ホテルのバルコニー。午後一時。

留雄 昨夜、雨が降つたんですか。

女中 いいえ。時々、夜露でこんなになることがございます。(欄干を拭く)
留雄 今朝は随分寒かった。

女中 お天氣のよろしい日には、夏でも、きまつて、朝は寒うございます。(問)先月は、ずつと雨でございましたから、今月はきつとお天氣が續きませうと思ひます。お客様も、今月になつて急に殖えたんでございますからね。

留雄 冬は淋しいでせうね、この邊は。

女中 どう致しまして、却つて冬の方が賑ひますの、スケートで。

留雄 ああ、さうか。(問)春秋は静かでせう。雪もまだ積らず、木の葉も出揃はないつていふ頃は。

女中 さうでございますね。十月と四月はひまな月としてございますけれど、日和さへよければ、手前どもなんかは、お客様が絶えませんが、温泉もございますし……。 (掃除を終りて) あの、お晝から、お二人とも、またお出かけでございませうか。

留雄 多分。どうして。

女中 いいえ、まだお部屋がそのままになつてをりますから……。今日はつい手が廻りませんで……。
留雄 かまはないから、後にして下さい。どうせ晩までには散歩に出るから。

女中 畏こまりました。(カクシより監ビンを取り出し)ここにこれが落ちてをりました。奥さまのでご

ざいませう。(留雄に渡さうとする)

留雄 その邊に置いといたらいいでせう。

女中 では、ここへ。(テーブルの上に置く)ご免下さいませ。(退場)

留雄 (急に暗い顔をして欄干に倚る)

ルイズの聲 あなたそこにゐるの。

留雄 (聞えないふりをしてゐる)

ルイズ (毛絲のジャケットに手を通しながら出て来り) どうして置いてきぼりにするの。

留雄 (背を向けたまま) 話が長くなると思つたから……。

ルイズ あなたを紹介しようと思つてゐたのに、いつの間にかゐなくなつてゐるんですもの。

留雄 (ルイズの方を向いて) それは失禮。誰です、あれは。

ルイズ あたしの學校友達よ。綺麗でせう。(問)もう結婚して五年になるの。旦那さんは田舎の大地主だけれど、ずつと巴里にゐて、交際社會にも顔の賣れた人。あれでもう四十なのよ。氣取つてるから若く見えるわね。

留雄 今日来たんですね。

ルイズ この土地へは一週間前から來てるんですつて。パライスに泊つてるの。ここへかはつて來るらしいわ。食事を褒めてたから……。

留雄 僕のこととは知つてるんですか。

ルイーザ それがね、詳しい話をしようと思つてうちに、なんだか變な工合になつて……(問)でも、日本の畫家で、あたしの親しいお友達だつて、さうは云つておいたんだけど……。

留雄 さうですか。(ぶいと背を向ける)

ルイーザ 今日お茶に呼ばれてるから、その時よく話をするわ。

長い沈黙。

留雄 (ルイーザに背を向けたまま、スケッチブックを取り出して、寫生をしはじめる。)

ルイーザ (留雄により添ひ、なだめるやうに) 少し歩いて見ない。

留雄 僕はもうここにゐるのがいやになつた。

ルイーザ どうして。

留雄 だんだん人がやつて来て、うるさいぢやありませんか。

ルイーザ 今時分は、どこへ行つたつてこれくらゐの人はゐるわ。避暑地で、こんなにひつそりした所は、めつたにないことよ。(問)ここなら、ホテルを一足出れば、殆ど誰とも顔を合はせなくつていいんぢやありませんか。(問)深い靜かな森もあるし……(問)これから、あの谷を越えて、向うの丘に登つて見ない。あの丘の麓に美しい湖水があるんですつて。道が悪から、あんまり人が行かないつて、昨日の馬車屋が云つてたわ。

留雄 あなたも人と顔を合はすのがいやなんですか。

ルイーザ あたしはかまはないけど……あなたが……(椅子に掛ける)

留雄 ええ、僕はいやです。殊に、さつき晝飯の時に行くはしたやうな眼附は、たまらなくいやです。

ルイーザ どんな眼附よ。

留雄 さつき、食堂で、あなたが向うに行つて話をしてゐる間、あの連中が、どんな眼附をして僕の方を見てゐたか、あなたは知つてゐますか。

ルイーザ あの人達が。

留雄 どんな立派な人達か知らないが、あの眼附はなんです。無禮きはまる。(寫生紙をしまひ、成る可くルイーザを見ないやうに歩きまはる)

ルイーザ 人の眼附なんぞ、どうだつていいぢやありませんか。珍しいから見てるんだわ。

留雄 珍しいから見る、なるほどね。あの人達に限らず、僕一人の時なら、まあ、さう取れないこともない。さうとばかりも云へませんがね。(問)然し、あなたと一緒にゐる時は、僕だけが見られてゐるんぢやないんですからね。あなたと一緒にゐる僕といふものが興味の中心になる。(問)興味だかなんだか知らないけれど……。(問)西洋の女を連れてゐる東洋の男が、どういふ意味で人の注意を惹くかが問題です。

ルイーザ 注意を惹くのは男の方と限つてゐないでせう。あたし達の場合なら……。

留雄 そこなんです。冷靜に考へて見ようぢやありませんか。

ルイーザ そんなこと考へたつてなんにもならないわ。

留雄 なつてもならなくつてもいいんです。世の中に不釣合な夫婦といふやつがありますね。なんだつてあんな男を、さう云はれる女も、好い氣持はしますまいが、あれでよく女の方が、かう云はれる男こそ、いい面の皮ですからね。(間) 僕達の方に注がれてゐる眼附が、ただ珍しいものを見る眼附だと思ふのは、どうですかね。(間) 僕の方には、少くとも、その眼附が、「こん畜生、黄色いくせに生意氣な」かう云つてゐるのが明かにわかるんです。

ルイズ 留雄さん、つまらないことを云ふのはよませうね。(間) 今だから云ふけれど、あたしと一緒に人前に出ることを、あなたが、なんだか憚つていらつしやるやうな様子が見えて來たので、あたし、不思議に思つてゐたの。それも、ここへ來てからよ。

留雄 つまり二人がかうなつてからでせう。さうです、僕は、自分自身がさういふ眼で見られることよりも、あなたが、僕と一緒にゐるために、氣まづい思ひをなさりはしないかと、その方が氣になるんです。それから惹いて、あなたの僕に對する心持に、暗い影がさすつていふやうなことが、ないとも限りませんからね。

長い沈黙。

ルイズ 人の思惑や、世間の口の端で、心がはりをするやうな女なら、棄ててしまつても惜しくはないぢやありませんか。(間) 實を云へば、あたしも、はじめの二三日は、人からじろじろ顔を見られるのが、なんだか氣恥しいやうな心持がしましたけれど、あたしがあなたのものであり、あなたがあたしのものだといふ氣持が、だんだんはつきりして來るにつれて、今

までは、自分を世間のうちに置いて、いくらか人ごとのやうにあたし達の關係を見てゐたのが、こんどは、自分を全く二人きりの世界に置いて、そこから、平氣で世間が眺められるやうになつたの。だから、人がどんな眼で見ようと、こつちからさういふ人達の眼を嗤つてやるだけの餘裕が出來てゐるわ。(間) あなたはあんまり考へ過ぎるのよ。あたし達が不釣合だとすれば、あたしの方に寧ろ足らないところがあるんだわ。

留雄 戯談おつしやい。あなたに缺點があれば、それは美し過ぎるといふ缺點でせう。

ルイズ そんなことはまあ別として、第一日本の女でないことが缺點よ。

留雄 僕が佛蘭西人でないといふことは、どうなるんです。

ルイズ それがあたしの望みはなんだからいいぢやないの。

留雄 僕もあなたが日本の女でないことを、幸ひに思つてゐるんです。

ルイズ そんなら、それでいいぢやありませんか。

留雄 あなたは、僕を日本人だから愛するんぢやないと云ひましたね。

ルイズ それは、あなたが、日本人だから愛するといふ愛し方ならいやだとおつしやつたからだわ。

留雄 さうでしたね。あなたが、日本といふ國に對して有つておいでになる執著が、日本人である僕に對する好意、更に愛情になつたのではないかと、僕はただそれを恐れてゐました。あなたの空想で築き上げられた殿堂が、どんなに美しいものであつても、僕がその殿堂の庭に

生えた草かなんぞのやうに、あなたの感傷的な氣まぐれを満たすために摘み取られることだけは、いやだと思ひました。(間)

ルイーザ まあ、そんな……。

留雄 僕の云ふことを終ひまで聽いて下さい。ところが、近頃になつて、やつとさういふ氣持が薄らいで來たのです。それといふのも、近頃のあなたには、僕を透して日本を見ようといふやうな態度が、殆どなくなつたからです。少くとも、かうして二人きりでゐるやうな時は、僕は、あなたが佛蘭西人だといふことも、僕が日本人だといふことも全く忘れてゐます。(間)ただ、どうかしたはずみに、僕が外國人であること、殊に、色々な點で隔りの多い人種に屬してゐる人間であることに氣がついた時、二人の間には、今まで知らなかつた大きな溝が、今まで感じなかつた大きな空虚が出來てゐるのです。さういふ時、あなたの顔は、まあ、頼りなさともいふやうな感情で、ひとりでに暗くなる。いいえ、それはほんたうです。(間)かうなつたら何もかも云はして下さい。あなたが僕と話をしてゐて、例へば、日本人のことを呼ぶのに、もう例の「あなた方」といふ呼び方はなさらなくなつた。然し、そのかはり、第三者と僕の話をする時のあなたは、決して、僕の腕に抱かれてゐる時のあなたではありません。あなたの心のうちに、或る戦ひが起る。その戦ひがどんな戦ひか、僕にはわかつてゐます。その戦ひを黙つて見てゐる僕は、自分の身を焼かれるよりもつらいのです。(間)今更、こんなことを云ふのも馬鹿げてゐますが、黄色人種に對して有つてゐる白人の感情は、

一般に、われわれが甘んじて受け容れられる性質のものではありません。ただ、どうすることも出來ないのは、肉體的の弱點です。猿のやうな顔面の骨格や、土のやうな皮膚の色は、もちろん、あなたが、よく、頸の短い、肩の怒つた、尻の細い、脚の曲つた男の後姿を見て、あれは日本人ぢやないかとおつしやるほど見すほらしい體格、それは白人でない僕自身でさへも、全く滑稽に感じ、輕蔑さへしたくなるほどの醜さです。(間)さういふ男の一人と腕を組んで歩くだけでも、白人の女にとつては、大きな屈辱であるべき筈です。

ルイーザ (キツとなり) 屈辱ですつて。(間) あなたは、ご自分をどんなに卑下なすつても、まあそれはかまはないとして、あたしが夫を選ぶために、總ての自由を與へられてゐることだけは忘れないで下さい。(間) あなたが、どういふわけで、そんなことをおつしやり出したか、あたしにはよくわかりませんが、若し二人の結婚に、何か不満をもつておいでになるならばつきり、さうおつしやつて頂戴ね。(間) あたしが普通の女だつたら、世間並に、たゞ女好きのする男、さういふ男にでもからだを委せたかもしれません。なるほど、異人種間の結婚は、餘程慎重に考へなければならぬ問題にちがひありませんけれど、あたし達二人は、お互に、先づそれぞれ相手の國を理解し、二人の間には、しつかりした心のつながりが出來てゐる以上、少しづつらるの障碍はこれから立派に取り除けられるものと思つてゐました。あなたのおつしやるやうなことは、ほかの女ならいざ知らず、少くとも、日本人の美しさ、精神的ばかりでなく、肉體的にも特殊な美しさを認めてゐるあたしには、まるで縁の遠いことで

すわ。そりや、いくらか人の前で、あなたにも氣づかれるほどの……心の戦ひは大袈裟だけれど、まあ、努力といへば努力をすることもあります。然し、それは、決して、あなたに對する不満から生れるのではなく、あなたがさつきおつしやつたやうな、白人の偏見から、どうかして、あなたを救ひたい、——言葉は悪うござんすよ——どうかして、日本人であるあなたの眞價に尊敬を拂はせたい、まあ、これもつまらない自尊心からでせうけれど、さう云つた心づかひが、ついふだんの落ち着きを失はせるのかもしれない。そんなことを、あなたが一々氣に留めていらしたら、それこそ、人前には出られないわ。それもあたしがそんなことを苦にしてゐれば別だけれど、さういふ一種のヴァニテは、誰にだつてあるんですからぬ。——(優しく笑ひながら) 殊に女にはぬ。

留雄 (いく分おだやかに) あなたの心持がそれだけわかれば、何も云ふことはありません。

ルイーズ さ、もう何も云ふことがなけりやここへいらつしやい。(別の椅子を引き寄せ、くつつけるやうに放る)

留雄 (間の悪るさうに腰を下ろす)

ルイーズ 散歩に出る。

留雄 僕はよしませう。(顔をそむける)

ルイーズ またそんな……(留雄の手を取つて) こつちを見てご覧なさい。

留雄 (そつとルイーズの方を見る)

ルイーズ (留雄の両手を取り、笑ひながら) さ、そして笑つてご覧なさい。

留雄 (しかたがなささうに微笑む)

ルイーズ (満足げに) さう、その通り。(留雄の方に顔を近づけ、聲をひそめて) ちよつとよ。

留雄 (極めて軽くルイーズの頬に唇をあてる)

ルイーズ 駄目、そんな。(更に顔を近づけ、留雄の眼を見上げる)

第五場

前場と同じ場面。月夜。

留雄 (椅子に倚り、瞑想に耽つてゐる)

オーケストラの舞曲が止むと、笑聲、拍手の音が交々聞える。

ルイーズ (夜會服にて現はれ、留雄を見つけて) いや、また置いてきぼりにして。くたびれたの。(後ろより留雄の頸に腕を捲きつける)

留雄 僕はもうあんな場所へ出るのはいやです。

ルイーズ わかつてよ。あたしだつて好きで出るんぢやないわ。(間) ぢや、もうここにもませう、ね。(留雄の傍に座を占める) 好い月だこと。

長い沈黙。

留雄 僕にかまはないで、あなた踊つてらつしやい。あの連中に悪いでせう。
ルイーゾ いいのよ。(問) 蟲が鳴いてる。

稍長い沈黙。

留雄 寒くはありませんか。

ルイーゾ ええ、少し。(肩をすぼめる)

留雄 (立ち上り奥に入る)

ルイーゾ どこへ行くの。

オーケストラの音が再び起る。

留雄 (ルイーゾのマントを持ち出で来る) これでいいんですか。

ルイーゾ ええ、ありがたう。(立ち上る)

留雄 (マントをルイーゾに着せかける)

ルイーゾ (着終りて、留雄の手を握る) 熱い手、熱があるんぢやない。(腰を下ろす)

留雄 (立つたまゝ) チョコレートはまだあつたかしら。

ルイーゾ あたしがみんな食べた。(問) おなががすいたの。(問) 何か取つたら。

稍長い沈黙。

留雄 ねむい。

ルイーゾ これぢやねられないわね。(問) どうして、そんな所に立つてるの。

留雄 (腰を下ろす)

ルイーゾ 踊れるんでせう、あなた。

留雄 馬鹿々々しくつて。

ルイーゾ でも、たまには面白いことよ。考へちや出来ないわ、あんなこと。(問) やつぱり生活

次第ね、なぐさみなんていふものは。

留雄 一時、努めてやつて見ようと思つたこともありますが、これはかりは、どうしても氣

がひけて……。

ルイーゾ 日本人獨得の自己批判ね。いいことだけれど……損もするわね。

留雄 或る程度まで自分を忘れることによつて、却つて自分の存在をはつきり掴むといふやうな

ことも、考へて見たことがあります、パラドクサルな云ひ方だけれど。

ルイーゾ それはほんとな。

留雄 強く活きるために、生活意識ほど邪魔になるものはないと思ひます。

ルイーゾ さうとも云へないわ。日本人の有つてゐる鋭敏な生活意識は、歐羅巴の生活に織り込

まれてゐるやうな、強烈な刺激には堪へられないのよ。

留雄 さうかと云つて、日本人の多くが、今でも棄てられないでゐる概念的な感情の遊戯には、

僕だつて、あきたらないんですがね。

ルイーゾ つまり、古い玩具を棄てて、新しい玩具の方に手は出したものの、さて、その玩具で

遊ぶ段になると、どうも勝手が違つて、面白くないつて云ふわけね。(問) あたしは、その二つの玩具で面白く遊ぶことを知つてゐるの。

オーケストラの音止め、一としきり、拍手、笑聲が聞える。

留雄 日本には、ご存じの通り、和洋折衷と云ふ言葉があります。

ルイーゾ 折衷と云ふことは、必ずしも、ちくはくと云ふことではないでせう。(問) 怒つちやいやよ。折衷主義をけなすあなたが、現在一番ちくはくな生活をしていらつしやるんぢやなくつて。(問) 西洋の生活を肯定なさるあなたの思想は、日本人としてあなたが有つておいでになる伝統的な感情、それは恐らく世の中で最も洗煉された感情よ——その感情と背中合せをしてゐるんだと思ふわ。日本人の美しい感情生活を土臺にして、西洋の論理的な思想生活を築き上げることは、あたし達にはそんなむづかしいことぢやないでせう。ただ、それには、一方の生活を全然棄ててしまふと云ふやうな間違つた考へを、起してはならないのよ。(問) それからまた、さういふ新しい生活が、比較的動きつつある日本の社會に、生れる可能性が多いといふことも考へて見る必要があるわ。

留雄 それで、日本に行かうとおつしやるんでせう。(相手の心中を見破つた語り、さういふ語りを示した笑ひ方をする)

ルイーゾ (ためらひながら) まあ、さういふことになるわね。(問) あなた、どう思つて。

留雄 僕達はどこへ行つても、ここに居る以上の自由は得られないと思ひます。自分を脅かし束

縛する社會に、どんな優れたものが潜んでゐようと、その社會は全體として自分を活かしてはしません。あなたが憧れておいでになる日本と、僕が惜しげもなく棄てた日本との間に、どれだけの隔りがあるか、それは、僕だけが知つてゐて、あなたには分らないんです。舊い日本のことは云ひますまい。また、將來の日本がどうならうと、そんなことは僕達の知つたことぢやない。僕達は、ただ、現在の日本が、どの點から見ても、矛盾と破綻に満ちた住み心地の悪い社會であることを知つてゐるだけで澤山です。あなたの美しい空想をぶちこはすだけでも、今日日本に行くことは考へものです。現實の日本が、あなたにどんな印象を與へるか、それを思ふと、僕は、自分が日本人であることを情けなく思ひます。目のあたり赤裸々な日本人の生活をご覧になつて、あなたは、きつと、日本人を夫に有つたことを後悔なさるに違ひありません。その時、この僕はどうなるんです。

ルイーゾ (笑ひながら) 大丈夫よ、留雄さん。あたしは、現在の日本を最も正しく視る方法を父から教はつてゐます。その點は誰よりもあたしを信じて下さい。

留雄 われわれは、學者や藝術家のやうな態度で、常に自分の周圍に接することは出来ませんか
らね。

ルイーゾ 出来ない筈はないでせう。

留雄 出来ません。

ルイーゾ 出来ます。(挑むやうに留雄の顔を見つめて笑ふ) 出来てよ。

留雄 あなたが日本に行かうとおつしやるのは、外に理由があるんでせう。
ルイーズ どんな理由。

留雄 あなたはやつぱり、ここで僕達に注がれてゐる世間の眼を怖れてゐるんですね。日本に行けば、さういふ眼から遁れることが出来ると思つておいでになるんでせう。

ルイーズ あなたはさうお思ひにならない。

留雄 あなたは、僕と一緒にここにゐるのが、そんなに辛いんですか。(立ち上つて、ルイーズの側を離れる)

ルイーズ まあ驚いた。あなたはさういふものの考へ方をなさるの。(間) あたしが怖れてゐるのは、世間の眼ではなくつて、それを怖れておいでになるあなたの眼よ。(間) だから、あなたが、ご自分と親しい周囲に取巻かれるといふことが、あなたにとつても、あたしにとつても、結局幸福ぢやないかと思ふんだわ。

留雄 僕にとつて自分と同じ周囲が、あなたにとつてはどうか、それはわかつておいでせうね。ルイーズ 日本にゐる外国人は、みんな日本人の憤み深い待遇に満足してゐます。あたしは、日本に行つて、あなたが歐羅巴で遭遇なさるやうな——それもいくらか、あなたの思ひ過ぎがあるにはあるけれど——さういふ眼附で見られるやうなことは先づないと思ひますわ。

留雄 なるほど、さうでせう。白人種の優れた特質が、黄色人種の社會で、一層光つて見えるのは、當り前ですからね。

ルイーズ (嘆願するやうに) 留雄さん。

留雄 僕は日本に行きません。(間) 行くのはいやです。(間) 僕は佛蘭西の、自由な生活だけが、人として、また藝術家としての僕を寛大に育ててくれることを信じてゐるのです。さうして、その生活の中で、佛蘭西人であるあなたの細やかな情熱が、僕の魂を焼きつくしてくれることを望んでゐるのです。

オーケストラの音、更に起る。

ルイーズ (隠きもせず、遠くのものかを見つめてゐる)

留雄 (ルイーズの傍らに腰を下し) ルイーズさん、日本に行くことだけは思ひ止つて下さい。

ルイーズ ぢや、しばらくでいいから、兎も角日本を見せて頂戴。永住しなくつてもいいから、旅行者として、日本を訪ねるだけ。ね、それならいいでせう。いやになつたら何時でもこつちへ歸つて來ることにして、一と先づ、この土地を離れて見ませう。

留雄 どういふ理由があつても、僕は日本の土を踏みたくありません。(間) そんなに行きたければ、あなた一人で رفتらどうです。

ルイーズ あたし一人で。(かう云つて、殆ど脅迫的な身構へをする)

留雄 だつて、さうするよりしかたがないぢやありませんか。

ルイーズ (憤りを抑へて) ようござんす。さうしませう。(唇を噛む)

留雄 僕の云ひ方が悪かつたかもしれません。一人で行けと云つたのは、勝手にしろといふ意味

ぢやなかつたんです。日本を見たいと云ふあなたのお望みは、早晚實現させなければならぬ。僕は色々の事情で一緒に行くことは出来ないけれど、幸ひあなたは旅行にも慣れておいでになるし、時機を見て、長くとも一年か二年、……

ルイーズ いいえ。(問)あなたが日本に行くのがいやだとおつしやるなら、あたしは佛蘭西にゐるのがいやだとも云へるんですからね。二人の違つた欲望を同時に満たすことが出来ないと思ひます。あなたはご自分のかたくなな自尊心で、二人の生活を破壊しようとなさるんですね。

留雄 さうでせうか。あなたこそ、ご自分の見榮と氣まぐれで、二人の愛を傷けようとなさるんぢやありませんか。

ルイーズ (努めて冷やかに) さあ、どうでせう。(問)あなたも、わからない方ね。

長い沈黙。

留雄 この問題は、僕達二人だけで解決できる問題ではないと思ひます。

ルイーズ 第三者に相談のできる問題でもないでせう。

留雄 だから、この問題はそのままにしておいて、もつと根本から二人の立場をはつきりさせておかうぢやありませんか。

ルイーズ 立場といふと……。

留雄 僕達は自由なんですからね。

ルイーズ (息づまるやうに) それはわかつてるわ。(問)ぢや、やつぱり、勝手にしろとおつしやるのね。(涙ぐむ)

留雄 さういふものの云ひ方はよしませう。お互に自由を尊重することは、お互のすることに無關心であるのとは違ひます。二人の愛が、しつかりした根柢の上に築かれてゐるものなら、離れてゐる二人を何時かまた結び附けるでせう。僕達は先づ信じ合はなければなりません。

ルイーズ (泣きながら) その愛がほんたうの愛なら、今二人を引離す筈はないと思ひますわ。愛よりも強い何ものかが、あなたを支配してゐるんです。信じ合はなければならぬとおつしやるけれど、あたしは、あなたをどう信じていいのかわからないぢやありませんか。

留雄 あなたも少し蟲がよすぎはしませんか。假に、僕があなたに譲歩するとします。あなたはそれを愛の實證となさるでせうが、僕は何によつてあなたの愛を確かめることが出来るのです。ルイーズ (情けなさうに) だから、あなたはわからないつて云ふの。あなたは、あなたご自身のことばかりしか考へていらつしやらないけれど、あたしは、あたし達二人、殊にあなたのため考へてゐるんだわ。

留雄 それが實際、僕達の爲にも僕の爲にも、ならなかつたらどうします。(問)あなたもやつぱり、そんなことで人が悦ぶと思つてゐるんですね。

ルイーズ なんの意味、それは。

留雄 なんでもありません。

ルイーズ (むつとして) あたしは、それがきらひ。ちゃんと云つたらいいぢやないの。

留雄 (黙りこくつてゐる)

ルイーズ (脅かすやうに) なによ。(問) 云はないの。

留雄 僕の爲だなどと云はずに、あなたご自身の爲に、日本に行くなら、やつぱり一人でいらつしやい。(問) 一時でも二人が別れてゐることは、僕達にとつて尊い試煉です。僕だけは、甘んじて、その試煉を受ける覺悟をしました。

ルイーズ あなたの冷たい覺悟で、どうやらあたしの決心も眼をさましたやうです。この決心が鈍らないうちに、早く旅の支度をしませう。(立ち上つて、欄干に倚る)

オーケストラの音止み、更に激しい拍手と、けたたましい笑聲が起る。

第六場

留雄の畫室。午後十時。

留雄、寢臺に寝てゐる。

留雄

(房子の差し出す茶碗を受取り) ありがたう、あなたは。

房子

あたし、あとで。濃すぎやしない。

留雄

(茶を飲みかけて) 熱い。

房子 あら、ごめんなさい。(笑ふ)

留雄 もう遅いでせう。

房子 まだいいわ。どうせ歸つたつて、なんにもすることはないんだから……。

留雄 手塚君が心配するといけない。

房子 いいのよ。ここに來てることがわかつてるんだから……。

稍長き沈黙。

留雄 何時です。

房子 十時よ。ルイーズさんは今頃どの邊かしら……船があしたの朝だから忙しいわね。でも元氣ね、あの方。やつぱり西洋の女はえらいと思ふわ。どこへでも一人で平氣で行けるんだから……(問) あかり、もつと小さくしませうか。

留雄 あかりもあかりだけれど、窓掛をしめて下さい。いやに暗い空だなあ。

房子 月がないんですもの、今夜は。(立ち上り、窓掛を引き、ランプを細めて座に着く)

留雄 ほんとに、僕にかまはないで、もう歸つて下さい。

房子 (黙つて氷嚢に手をのせる)

留雄 僕の心は今、落ちつく所に落ちついてゐます。孤獨といふ深い洞穴がそれです。自分の聲だけが自分の耳に響いて來る、それをぢつと聴きすましてゐるほど、安らかな生活がどこにあります。

房子 さ、もうそんなことは考へないで、静かにおやすみなさい。

留雄 僕の心はもうあの女から離れてゐます。僕は誰からも可哀想だと思はれるやうな人間ではありません。

房子 わかつてよ。駄目よ、そんなに興奮なすつちや。

留雄 僕は女を戀する力もなく、女から戀される資格もない男です。

房子 (たしなめるやうに) をかしいわ、そんなことおつしやつちや。

留雄 あなた、日本に歸ることはどうになりました。

房子 (黙つて顔を伏せる)

留雄 こんなことを聞くんぢやなかつた。

房子 もう、何にも云ひつこなし、ね。あなたは熱があるんだから、話をなすつちやいけないの。

留雄 僕、もう寝ますから、通りが賑かなうちに御歸りなさい。タクシイがなくなりますよ。

房子 ええ、おやすみになつたら歸るわ。(傍らの書物をひろげて讀む。時々、留雄の汗を拭いたり、水鏡の位置を直したりする)

留雄 房子さん。

房子 え。

留雄 僕は、あなたの前に跪いて、宥しを乞ひたいやうな氣がします。(間) なんにもならないでせうか。

房子 (極く低く) そんなことをなさらない方がいいわ。

長い沈黙。

留雄 僕はかうして、あなたの親切を受けてゐるのが苦しいんです。あなたの氣高さを氣高さとして享けられることが、どうしてもできないんです。さういふ僕の心持は、不純なものでせうか。

房子 さあ、それはあたしにはわかりませんわ。こんな場合に、友情がどんな役目をつとめるか、

あなたはそれをご存じないのね。

留雄 その友情が、普通の友情から見てもつと運命的なものだとは思ひませんか。

房子 さう思はなくつたつていいわ。

留雄 思つても差支へないでせう。

房子 いいえ、それはいけません。

留雄 どうしていけないんです。

房子 あたしは、女としてあなたに會はせる顔はないんですからね。あなたも、男として、あたしに物をおつしやることはできない筈よ。いいえ、意地ぢやないの。さういふものよ。

留雄 だから僕はあやまつてゐるんです。もう遅いとおつしやるんでせう。あなたは、僕が昔苦しんだだけ苦しむとおつしやつた。こんだはまた、僕が苦しむ番ですか。

房子 あなたのおつしやることがほんとなら、あたしも一緒に苦しみますわ。どつちの苦しみが

永く續くか、こんどこそほんとにそれがわかるわ。さ、もうおしまひ、この話は。

留雄 待つて下さい。あなたは苦しむために苦しむといふことが、つまらないことだと思ひませんか。

房子 だからいいのよ……あなたにこの氣持がわかる筈はないし……。 (間) それに、またルイズさんのことをお忘れになるのは早いわ。そんなものぢやなくつてよ。ルイズさんは、今日、あなたが停車場へいらつしやらないことを不思議に思つていらつしやつたわ。汽車が出るまで改札口の方ばかり見て……。

稍長き沈黙。

留雄 もうなんにも云ひますまい。この問題は時が解決してくれるでせう。ただ、僕が一人ぼつちだといふことだけ信じて下さい。

房子 あたしも一人ぼつち……。

留雄 (憐みを求めるやうに房子の顔を見る)

房子 だけど、あたしは、一月前のあたしぢやなくつてよ、どんなことがあつても……。

留雄 房子さん。(泣いてゐる)

房子 さ、なんにも云はないで寢ておしまひなさい……。涙なんか出して……お馬鹿さんね。(留雄の涙を拭いたハンカチで、そつと自分の涙を拭く)

大正十三年三月

チロルの秋 一幕

時 一九二〇年晩秋

所 奥伊の國境に近きチロル・アルプスの小邑コルチナ。

人物

アマノ
ステラ
エリザ

ホテル・パンションの食堂。午後七時。

ストーブの火が燃えてゐる。

ステラ、喪服、ヴェールで眼を覆つてゐる。珈琲を飲みながら、書物の頁を繰る。

エリザ、珈琲注ぎを持ちたるまま、傍らに立つ。

ほかに誰もゐない。

エリザ 明日はあなたがおたち、明後日はアマノさん……。

さうすると……

あとは、このホテルも空つぽ……。

沈黙。

ステラ 汽車の時間はわかつて？

エリザ まだ伯父さんが歸つて來ませんの。

もう一日お延ばしになつたら……

ステラ だつて、もう荷物ごしらへをしてしまつたんですもの…… (聞)

それに……

雪でも降り出すと厄介だし……。

エリザ 大丈夫ですわ、まだ……

牧場のサフランが咲いてゐるうちは…… (間)
でも……急に寒くなりましたわね。

ステラ 折角、いい落着き場所を見つけたと思つてゐたのに……。

エリザ あなたのやうに、夏はどこ、冬はどこつて、自由に旅行がなされる方は、おしあはせですわ。

ステラ あたしも、出来ることなら、一と所に落着いて暮したいの…… (間)

これでもう、一人ぼつちの旅を二年……

どこへ行つても、何かしら氣に入らないことがあつて、かうやつて方々を歩き廻つてゐるんだわ。

エリザ アマノさんも、そんなことおつしやつてましたわ……。

あの方も、お國をお出になつてから、随分になるんですつてね。

寒いのは、かまはないから、ここにおいでくればおつしやるんですけど、あの方お一人のために、このホテルを開けておくわけにも行きませんし……

ステラ (書物に眼をおとして) フロレンスへいらつしやるんですつて、あの方……？

エリザ さあ……。

それもまだ、はつきりお決めたわけぢやないんでせう。

あなたが、シシリーへいらつしやるつていふお話をしたら……

ステラ (笑ひながら、眼をあげて) なんて？

この時、アマノ、手にサフランの花束を持ちて入り来る。

エリザ ごゆつくりでしたわね。

アマノ 遅くなつてすみません。(ステラの方に花束を差し出し)

綺麗でせう。

ステラ (花束を受取り、香ひを嗅ぎながら) あたしに？ まあ、ご親切ね、あなたは。

アマノ (食卓に着き、エリザに) 今日はなに……？

エリザ (皿を運びながら) 鮎ですの。そのあとが、^{かかし}羊と栗……。

アマノ 奥さんは、もうお済みですか？

ステラ (書物から眼を離さずに) ええ、お先へ……。

ごゆつくり召上れ。

アマノ (食事をしはじめ) うまい。

ステラ どこへいらつしたの、今日は？

アマノ (やや皮肉な微笑をうかべ) 例のところ……。

ステラ (努めて気軽に) お城……？

アマノ よくご存じですね。

ステラ 別に不思議はないでせう…… (問)

さういふことがお好きね、あなたは。

アマノ どういふこと……?

ステラ 人に見られないやうに、人のすることを見たりなんか……。

アマノ 見られてるから世話はない。

それに、あそこは公園です。

あなたも、見られてわるいやうなことはなさらない。

ステラ よしあしにかかはらずよ。

あたし、あの山に映る夕陽の色が好きなの……。

アマノ 莊嚴ですね、あの眺めは。

ステラ ミスチックなところがあるでせう。

祈りの美しさね。

アマノ 一體、チロルの自然は——生活もさうだが——宗教的な美しさをもつてゐます……。

あなたはクリスチャンでせう?

ステラ あたし、無宗教……。

アマノ 無信仰ぢやないでせう。

色平中

9

ステラ どう違ふの……結局。

アマノ 僕は、まだ、あなたがほんたうに何國の方だか知らないんですよ。

ステラ 宿帳をご覧になればわかるわ。

アマノ 宿帳は宿帳ですよ。

あなたは、アメリカ人ぢやない。(相手を見据える)……

ステラ さう? (かう云つて、珈琲の最後の一口を飲み干す)

アマノ 僕は、自分が日本人であることに、それほど注意してゐない。それだけ、人が何國人だといふことにも、あんまり興味がないんです。

われわれは、それほど、かけ離れた生活はしてゐないと思ひます。

ステラ それはさうね。(席を起ち、長椅子に投げかかる)

そりやさうだわ。

沈黙。

アマノ 奥さん、たうとうお別れしなければなりませんね。

ステラ (言葉を用意してゐたやうに) 一生のお別れかもしれないわね。

エリザ お二人とも、また春になつたら、ここへいらつしやるんでせう?

いつか、さうおつしやつたわ。

ステラ (笑ひながら) あたしは、あなたにさう云つたのよ。

アマノ 僕はどうだつたかなあ……。

何れにしても、一生の別れ……さういふ気がしますね。
わるい氣持ちやないな……お互にさうなら……。

ステラ (半ば微笑を以て) ほんと……。

アマノ 旅をする人間の心持は、變なものですね。

友情に對しては、恐しいほど敏感になる……。

そのくせ、情熱の前には、可笑しいくらゐ臆病です。

さうお思ひになりませんか。

ステラ さあ……情熱つて……。

アマノ ええ……。

僕は今日、つくづくさう思ひました。

ステラ (耳を澄まして) エリザさん、聞えない……？ 窓……。

エリザ (急いで、一方の窓に馳せ寄り、カーテンを細目にあげ) どこ……？

アマノ (面白がつて) こつちだ。

エリザ (もう一方の窓に行き) うそ。

ステラ (笑ひながら) やつぱり、こつちよ、そら……。

エリザ (そつちへ行き、今度は思ひ切つて窓を開け)

ここよ、ルナアト……。

どうしたの？

え、伯父さん？

町へ行つたの……？

まだいいのよ。

あら……

ぢや、どこで……？ 今すぐ？ ぢき行くから待つてて。(窓を閉める)

ステラ ここへ連れていらつしやいよ、一度……。

エリザ (そはそはしながら、アマノに) ゆつくり召上つていいわ。

アマノ ゆつくり……？ 不思議だなあ……。

ぢや、食ふものは、みんな、ここへ出しといて……

勝手に食ふから……。

エリザ (次の皿と珈琲を運び) ほんとにいいこと……？

アマノ 伯父さんに云ひつけようかな。

エリザ さうしたら、逃げ出すばかりだわ、あたし…… (くるりと廻る)

ステラ さうさう……。

早く行つておあげなさい。

じれつたがつてゐるわ、あなたの少尉さん……、劍をがちやがちや云はせて……。

エリザ (もちもちして) たまにはいいのよ。
ステラ おや……今頃から。

エリザ (髪に手をあてながら、戸口に近づき) 伯父さんが歸つて來たら、もう寝てるつて云つて頂戴ね。

アマノ どこで……？

エリザ (走り去りながら) いやな方。

アマノ この夏、或る獨逸の士官に聞いたんですがね……戦争中、佛蘭西の田舎を占領してゐた先生たちの中隊が、いよいよ引上げるつていふ日、村ぢゆうの若い娘たちが、道ばたで、磔を立てて泣いたつて云ひますからね。

ステラ いやな話ね。

アマノ さうかしら……。

ステラ それに…… (何か云はうとして急に口を噤む)

アマノ あなたは、人間の情熱といふやうなものを、わりに、甘く見ておいでのやうですね。

ステラ わりに……ですか？

アマノ さうでせう。

ステラ あなたこそ、日本の方らしくないのね。

アマノ どうしたと云ふんです？

ステラ いいえ、なんでもないの。

もつと日本の話を聞かして下さらない？

アマノ (笑つて答へたり)

ステラ ちつとも、お國の話をなさらないのね、あなたは。

アマノ あなたは……？

ステラ 長崎つて、佳いところでせう？

アマノ そんなことを聞いて、どうなさるんです？

ステラ どうもしないけれど……。

アマノ それより、あなたは、ほんたうは何國の方です？

ステラ さつき、なんておつしやつて？

アマノ 僕がなぜ、それを知りたがるかつていふと、あなたは、ことさらに隠しておいでになるからです。

僕はあなたが、奥太利人であるよりも、伊太利人であることを望んでやしませんよ。

ステラ 知つてますわ。(間)

それはどうだか、わかるもんですか。

ぢや、あててご覧なさい。

アマノ あてますから、一度、あなたのお眼を拜見

(立ち上つて、ストーブのそばに行く)

ステラ どうぞ……いくらでも……。

アマノ ヴェールをどけて……。

ステラ いけません、それは……。

アマノ それご覧なさい。

あなたも、そんなことが、好きなんですね。

ステラ 駄目よ、そんなことおつしやつたつて……。

アマノ (ステラに背を向けたまま) ヴェールを透して見るあなたのお眼は……ものを言はない口のやうなものです。

あなたの眼の中には、きつと、僕が今まで知らなかつたものが、あるに違ひない。

ステラ ものずきね、あなたも……。

アマノ いけませんか…… (間)

あなたは、よく泣いておいでですね。

沈黙。

ステラ ……。

アマノ あなたの涙は、夢から夢を傳はる涙でせう。

ステラ (溜息) あたしの夢……それは、どんな夢だかご存じ?

アマノ (振り向いて) あなたの夢ですか……。

それは、現実のすべてを包む霧のやうな夢です。

あなたが、旅をなさる……それも、あなたにとつては、一つの夢……。

讀書をなさる、……それも夢……。

戀をなさる……それも一つの夢……。

ステラ 待つて頂戴……。

かうして、あなたとお話をしてるのは……。

うそ……。

第一、あたしは生きてゐます。

アマノ あなたは、あなたの夢を生きておいでになる。

ステラ そんなら……一つの夢をね。

アマノ 思ひ出でせう……悲しい、華やかな……。

よくあるやつだ。

ステラ うれしさうね。

アマノ ちつとも…… (眞面目に)

僕がやつぱり、さうなんです。

沈黙。

ステラ さうおつしやるだらうと思つてゐました。

アマノ 云はなくてもよかつたんです。

ステラ ぢや、何かもつと、ほかの話をしませう。

アマノ ほかの話……それもいでせう。(問)

あなたが、いつも読んでいらつしやる本……あれはなんですか……？

ステラ これ？(手に持ちたる本を見せようとして、慌てて後ろへ隠し)

なんでもいいぢやありませんか。

もう、あたしに、なんにも訊かないで頂戴、ね。

質問は、一切、受け附けないことよ。

アマノ それぢや、お話ができない。

今まで、かういふ機会がなかつたんです。

食事がすむと、あなたは、いつも人を避けて、讀書と冥想に耽つておいでになる。

この食堂以外、僕は、あなたに近寄ることすら出来なかつたんです。(問)

今日は、最後の晩ぢやありませんか。

ステラ 最後の晩……。

それも、空想の遊戯ね。

アマノ さうです……。

その空想の遊戯を、もつと面白くする方法はありませんか……二人で……。

お断りしておきますが……、

あしたの朝、あなたの馬車があの時を越えたら、僕は永久にあなたの夢から消えてしまふ男です。

ステラ あなたは、眞面目に、そんなことをおつしやるの？

アマノ さういふものぢやないでせうか。

旅人同志の心は、約束に縛られない友情で結びつけられるものです。

また握れるかどうか、わからない、さう思ひながら握る手に、旅らしい自由な力がこもるん

ぢやないでせうか……。(問)

このチロルの山奥で、お互に身の上話さへしたことの無い二人が……

二度と再び會はないといふ誓ひを立てた上で、

久しく別れてゐた戀人のやうな一夜を明かして見たら……

どんなに、面白いでせう。(問)

ようござんすか……、

あなたは、夢を見ておいでになる。

もう一人、夢を見てゐる男がある……。

二人の夢が、重なり合ふ……。

ただ、それだけ……。(問)

夢で遇つた二人が、夢で戀をする。

どうです……、

さういふ戀を、一度、してみたいとは思ひませんか。

ステラ あたしは、一人で夢を見てゐる方がいいの。

アマノ あなたはあなたで、好きな夢をご覧なさい。

僕は僕で、好きな夢を見ます。

ステラ それで、どうするの？

アマノ あなたが愛していらつしやる男が、僕だとします。

ステラ あなたが愛しておいでになる女が、あたし……？

アマノ 僕とあなたではない……

あなたの戀人と、あなた……

僕の戀人と、僕……

とが、今ここにゐるわけです。

ステラ (笑ひながら) それから……？

アマノ それからは、云はなくつてもおわかりでせう。

ステラ それぢや、ままごとね……

お芝居ね。

アマノ 眞剣なままごとです。

眞剣なお芝居です。

さ、

あなたは、僕を愛してゐる……。

ステラ だつて……。

アマノ さうしておくんです。

ステラ あなたは、あたしを愛してるの？

アマノ ええ……。

下手な経験よりは、合理的な想像の方がいいんですよ。

さ、かうして、

あなたの戀人が、あなたの足許に跪いてゐます。(跪かない)

ステラ (笑ふ)

アマノ 笑つちやいけません。

ステラ 薪をくべませう。

アマノ (薪をストープにくべながら) 僕は、あなたの心臓に耳を當てて、微かな囁きを聞き漏すまい

としてゐます。あなたの唇から漏れる吐息を…… (ステラの傍に近づき)

胸一つばい吸ひ込まうとしてゐます。

あなたは、それを感じておいでになる。それは、夢です。
さ、

その夢の先を見ませう。(ステラの傍に寄り添ひて腰をおろす)

ステラ (イヤ聲をふるはせて) をかしいわ。

アマノ をかしい……？

をかしいと思ふから可笑しいんです。

子供の遊びを、大人が見てゐてはいけません。

(ステラの耳に口を寄せ) 僕はあなたを愛してゐます……心の底から愛してゐます。

僕は、あなたの美しさに、魂を奪はれてゐる男です……。

月竝だなあ……。

然し、まあ、いい……聞いて下さい……。

僕は、あなたの夢を亂したくない。

僕も、僕の夢を亂したくない……。

戀を遂げた刹那の歡びは、永久に續くものではありません。

僕は、あなたを獲た瞬間に、あなたを失ひたいんです。

わかりますか、僕の云ふことが……？

わからない？

僕が、あなたに愛されてゐると思ふ瞬間……

あなたの唇が、僕の唇に觸れる瞬間、

その瞬間は、

僕の生涯を通じて、最も幸福な夢なのです……。

先づ、僕の手を強く握り締めて下さい……。(ステラの手を取る)

ステラ (身ぶるひして) お芝居よ……

ほんとにお芝居よ……。

アマノ (両手を取らうとして) 怖がつちや駄目……。

ステラ (アマノ手を拂ひのけて) いいえ、いいえ、いけません。

あなたといふ方が、あたしの夢の中に出て来てはいけません。

あたしは、それが一番……。

あなたのやうな方なの……あたしの夢をさますのは……。

アマノ 僕は、通りすがりの男です。

道ばたで、あなたの靴を磨いた男です。

汽車の中で、あなたに席を譲つた男です。

劇場で、あなたが、ハンケチを拾はせた男です……。

ステラ (しんみり) あなたは、女の心をこ存しないのね。

アマノ (ステラの手を取り) 無關心な女の心は、讀みやうがありません。

ステラ (思ひ返したやうに、アマノの手を握り締め) いいわ……。

ぢや、一緒にお芝居をしませう。

その代り、約束を忘れちやいやよ。

今夜だけ……。

ね、よくつて……

今夜だけ……。

(酔ったやうに) さ、もつと、何か云つて頂戴……

あたしは、淋しいの……。

今夜は、どうしてだか、淋しいの……。

今まで、見つけつけてゐた夢が、これでおしまひになるのではないかと、思はれるほど、淋しいの……。

い……。

さ、

早く、何か云つて頂戴……。

アマノ その前に、あなたの眼を、一度……。

ね、ヴェールをどけて……。(ステラの肩に手をかけ、引き寄せる)

おや、

どうして、泣くんのです？

沈黙。

ステラ (ヴェールを外し、涙をふく)

アマノ 何が、そんなに、悲しいんです？

ステラ 悲しくはないのよ……。

癖なの……。(アマノの方を見て微笑む)

アマノ ああ、これ、これ……

この眼……。(ステラを抱く)

ステラ もつと、しつかり、抱き締めて頂戴。

あたしは、あの人に抱かれてるのよ。

(だんだん熱を帯びて来る) あなたは、あたしの大好きな、大好きな人よ。

さ、もつと、強く……。

なんて静かな晩でせう。

ちやうど、あの晩のやうね……。

——昔だわ——

あなた、ふるへてるの……。(問)

あたしを騙しちや、いやよ。

あなたは、ひどい方……

今夜ぎりだなんて……。

アマノ (氣がついたやうに) あなたは、いつまでも僕のものです。

この腕が、骨になるまで、あなたを放しません。

ステラ いや……そんな氣味のわるいことを云つちや……。

それより、あなたのブロンドの髪が灰色になるまで……。

あたしの黒い瞳が、鳶色になるまでつておつしやい。

アマノ 僕の髪の毛は、ブロンドぢやありません。

ステラ そんなことは、どうでもいいのよ。

——どうせ、形容ですもの。

怒らないでね。

あなたは、日本の方ね。

あたしのお母さん、長崎で生れたの……。

ハマつていふ名……。

アマノ (驚いて、ステラの顔を見る)

ステラ どうして、そんなに吃驚なさるの？

あたしの眼が黒いから……？

それや、しかたがないわ。

あなた、黒い瞳は、おきらひ……？

アマノ (あらたまって) ステラさん、僕に、ほんとのことを云つて下さい。

今、おつしやつたことは、冗談ぢやないでせうね？

ステラ いやよ……そんな、怖い顔をしちや……。

アマノ (固くなって) もうお芝居はよしませう。

僕は、あらためてあなたにお願いがあります。

あなたの身の上を打ち明けて下さい。

ステラ あなたは、變な方ね。

アマノ あなたには、僕の氣持がわからないんですか？

ステラ わかつて、わからなくつても、おんなじよ……。

どうせ、お芝居ですもの……

沈黙。

さ、そんな眞面目くさつたことは、云はないで、

夢の續きを見ませう。

あたしの氣が變つたら、もうおしまひよ。

アマノ 誤解しないで下さい。

僕には、ほんたうのあなたが、今わかつたやうな気がするんです。今まで知らなかつたあなたの眼の中に、僕は、自分の全生涯を見出したやうな気がするんです。

幸福な一瞬間では、満足ができません。

ステラ (アマノの頸に胸を投げかけ) いいから、もつと、こつちへお寄りなさい。

いつだつたかしら……

あの、ライン河の流れを見下ろす、

ヴィラ……なんでしたつけね……

いいの……

あたしが、初めて、あのヴィラに泊つた晩ね……

船遊びをした日よ……遅くまで……

あの晩……

あなたは、あんなに酔つてさ……

どうして、あんなに酔つたの？

あら、あたしが酔はせたの…… (いきなり、アマノを抱き寄せて、唇をあてる)

駄目よ、そんなに黙つてちや。(間)

あたしの寢室は、あなたの隣りだつたわね……

あたしが、窓を開けると、あなたも窓をお開けになつたわね。

それから、どうでしたつけ……？

アマノ (しかたなしに) それから、僕が咳拂ひをしたんです。

ステラ あ、さう、さう……

さうしたら……？ あたしは……？

アマノ あなたは、窓を閉めておしまひになつた。

ステラ うそばつかし……

あたし、唄を歌つたんぢやありませんか…… (小唄の一節を口ずさむ)

アマノ その唄なら、覚えてゐます。

ステラ ね。

それから、あのバルコニーよ。

静かな晩だつたわね……

……星が出て……。

あなたが、そら、をかしいの、子供みたいに……

覚えてる……？

アマノ それから、チロルの旅……

コルチナの秋の夜。

星のかはりに、ほら、ストーブの火が燃えてゐます……

ステラ あんまり早すぎてよ……

あなたは、昔から、せつかちね。

アマノ その途中は、もうたくさん。

あした、僕も、あなたと一緒に、シシリイへ行きます。

ステラ シシリイへ……？

蛇がゐてよ。

アマノ 蛇、蛇もゐるでせう。

あなたは、冷たい大理石の床を、素足で歩くことが、お好きでしたね。

ステラ オレンジ畑を吹いて来る風に、髪をなぶらせることも、好き……

さう、さう……

あなたは、笛がお上手ね。

アマノ (暗い表情) 笛ですか……

笛も吹きませう。

沈黙。

ステラ どうしたの？

あたし、何か云つたかしら……。

アマノ いいえ。(間)

(冷やかに) 誰と話をしてゐるんです、あなたは……？

誰です一體、その笛の上手なのは？

(気がついたやうに) 馬鹿でせう、こんなことを訊くのは……。

ぢや、それは、もう訊きますまい。(間)

しかし、なんとでも、返事をして下さい……

この僕に返事をして下さい。

眠くはありませんか。

ステラ (笑ひたさうに) まだ疑つていらつしやるのね、あなたは。

ぢや、いいから、あたしを、どこへでも連れて行つて頂戴。

さうして、あなたの氣のすむやうに……。

アマノ いいえ、いいえ、そんなことぢやないんです。

僕は、あなたの夢をさましたくなつたのです。

夢を見てゐないあなたの心に、なんとか、ものを云はせてみたいんです。

そうら、

もう、あなたは、そつちを向くでせう。

(ステラの肩に手をかけ) どちら……あなたの眼は、今何を見てゐるんです？

誰を見てゐるんです？

ステラさん……

僕の聲が聞えますか？

ステラ (微かに) しばらく、黙つて頂戴……。

沈黙。

あたし、どうして、かうなんだろう。

アマノ ね、をかしいでせう？

何を探してゐるんです、あなたは。

ステラ なんにも、探してなんぞゐませんわ。

アマノ ぢや、僕に用はないんですね？

ステラ あなたに……？

あなたは、どなた……？

いいえ、あなたは黙つていらつしやい。

……獨りで考へるから。

アマノ あなたは、ものを考へてはいけない。

あなたは、あなたの情熱が命ずるままに、からだを投げ出せばいい。

遠い幻を、いつまでも追ふことが、どれだけあなたを苦しめてゐるか、それにお氣がつきま

せんか。

ステラ ちつとも、苦しんでやしません……あたしは。

沈黙。

(殆ど悲痛な調子で) ——さうよ。

あなたさへ、あたしの眼に觸れないところにゐて下されば……

黙つてゐて下されば……

それより、

あなたといふ方さへ、全く識らなければ……。(聲がだんだん微かになる)

アマノ それなら、僕に、どうしろと、おつしやるんです？

(勝ち誇るやうに) 死んでしまへと、おつしやるんですか？

ステラ (きつぱり) ええ、死んでおしまひなさい。

アマノ (ステラの手を取り、飛び立つやうに)

ありがたう……。

僕の命は、あなたに差上げます。

その代り、

あなたの心は、僕が……

ステラ (遮るやうに起ち上り) 持つて行けるなら、持つていらつしやい。

沈黙。

アマノ ステラさん……。

ステラ もう、何時頃でせう。(窓ぎはに行き、カーテンを開けて、外を見る)

また、ひどい霧……

アマノ ストープの火も消えました。

ステラ ぢや、ほつほつ引上げませう。

沈黙。

アマノ ステラさん…… (起ち上る)

ステラ さうね……

やつぱり、獨りぼつちの方が、いいわね。

……夢だけ見てゐるんなら……。

アマノ (苦笑しながら) 眼が覺めた時です、遊び相手が欲しくなるのは。

ステラ あなたも、折角の夢をさまさないやうになさい。

それでは、おやすみなさい。

アマノ 僕の夢はすぐさめさうです。

ステラ (笑ひながら) さうしたら、また、「夢ごっこ」をしにいらつしやい。

道は、ご存じね。

アマノ あんまり遠くへ行かないで下さい。

ステラ (アマノに近づき) では、また、あしたの朝…… (手の甲を差し出す)

さよならを云ひに、起きていらつしやい……きつと。

アマノ さあ…… (ステラの手に接吻し)

それは、夢次第です。

ステラ (笑ひながら) ええ、ええ、ようござんすとも…… (用心深く手を引く)

おやすみ。

アマノ おやすみなさい。

ステラ (後を見ずに出で去る)

アマノ (ちつとステラを見送る)

室外にて、エリザ、エリザと呼ぶ囁れ聲。
沈黙。

— 幕 —

大正十三年九月

ぶ
ら
ん
こ
一
幕

妻 (チャブ臺の上に食器を並べながら) あなた、さ、もう起きて下さい。
夫 (奥より) 起きてるよ。一體何時だい。
妻 毎朝、わかつてるぢやありませんか。
夫 そんな時間か。
妻 いやね、どんな時間だと思つてらつしやるの。
夫 (跳ね起きるらしく) さうか。(間) カマキリは、まだ来ないだらう。
妻 (あたりに氣を兼ね) およしなさいよ、そんな大きな聲で……。
夫 (現れる) 昨夜はね、素敵もなく面白い夢を見たよ。
妻 (相手にならず) 齒磨のチューブが破れてるから、氣をつけて頂戴。
夫 (臺所へ行きながら) 鼠は出なかつたかい、昨夜は。
妻 (相變らず隣の上に氣を取られて) あなた、昨日の朝、どこへお置きになつたの。昨夕お湯へはいらつしやらなかつたし……。
夫 (楊枝を使ひながら) 今日は、一つ風呂へはひるかな。
妻 もう駄目ね、一昨日の午夢は……。
夫 さあ……。おれも今まで、いろんな夢を見たが、これくらゐ不思議な夢を見たことがない。
問。

夫
妻
夫の同僚

茶の間 朝

實に愉快な夢なんだ。

妻 手拭はあつたの。

夫 あつた。

夢だからつて馬鹿にはできない。

おれが、かう云ふと、お前はすぐに、夢があてになるもんですかと来る。

それや、夢で、金持になつたからつて、何も、ほんとに、金持になると限つちやゐないさ。そんなことを、あてにする馬鹿があるもんか。

問。

夢は、どこまでも夢さ。

それでいいんだ。

ところで、夢といふやつは、空想とは、また違ふんだ。

夢は、やつぱり、一生のうちで、實際に在つたことなんだ。

眠つてゐる間に、ちゃんと起つたことなんだ。

妻 葱が煮え過ぎても知りませんよ。

夫 葱……今日は、葱の汁か……。

さうか。

顔を洗ふ音。やがて、手拭で顔を拭きながら現る。

妻は、入れ違ひに、臺所から釜を提げて来る。

妻 お櫃をもう一つ買ふのね。

夫 (手拭を釘に掛け、長火鉢の前にすわり) 煙草を一ふく喫ひたいな。

妻 いいわ、時計と相談してね。

夫 (煙草に火をつけながら) まだ大丈夫。(外を見るやうにして) 好い天氣だな。

問。

つまり、夢に對するおれの興味は、夢そのものの面白さに在るんだ。

妻 (飯をよそふ)

夫 夢は、おれを退屈さから救つてくれる。

夢は、おれに、人生の木蔭を教へてくれる。

妻 (汁をつける)

夫 昨日と今日……今日と明日……その間に、おれは金のかからない旅をする。

楽しい旅だ。

おれにとつて、夢は、現實の一部なんだ。

希望だとか、理想だとか……そんな空虚なもんぢやない。

妻 (箸を取り上げ) あなたは、よくさう、夢が見られるのね。

夫 羨ましいか。そこで、昨夜の夢だが…… (箸を取る)

妻 その前に、この間の出張手當を、早く取つて来て頂戴。
夫 あ、さうさう。九圓七十錢……こいつこそ、夢でもいい……と、思ふのは間違ひで、今日は、是非、取つて来る。

沈黙。

妻 今朝は、卵なしよ。

夫 どうして。

妻 買つとくのを忘れたの。

夫 よし、さう出なくつちや……。

「忘れた」……

なんといふ言葉だ。

一切の醜さ、一切の暗さ、一切の苦しみ、恐ろしさを覆ふ言葉だ。

忘れてくれ、忘れて……何もかも、忘れてくれ。

妻 (きまりわるさうに) あら、ほんとに忘れたのよ。

夫 (強ひて笑顔を作り) 炭がね……。

妻 (妻の顔を見て) あ、ほんとだよ。

妻 さう?…… (涙ぐむ)

夫 馬鹿、馬鹿……お前は、夢を見ないから、いけないんだ。

たまに見れば下らない夢しか見ない。

妻 だつて、どんな夢が面白いんだか、わからないんですもの。

夫 なるほど、いつか話した夢は、あんまり込み入つてて、お前にはわからなかつた。

わからなかつたから面白くなかつたんだ。

昨夜のは、きつと、わかる。わかるやうに、話してやる。

お前は、おれの妻だ。おれが、どんな夢を見たか、

それくらゐのことは、知つてなけれや。

妻 (夫の茶碗を取り、飯をつける) たくさんつけてよ。

夫 おい、おい。

妻 また、お晝までに、お腹が空くわよ。

夫 (茶碗を受取りながら) それは、まだ、おれが小さい時分のことらしい。

小さいと云つても、十六か十七……

變に世の中が寂しい頃だ。

問。

いつも云ふ通り、

おれには、友達といふものがなかつた。
遊ぶと云へば、

一人で

蜻蛉を捕るか、

冬なら

日の當る裏山の斜面で、

遠くの森を

毎日毎日

繪にかく――

それが楽しみだつた。

いやよ、そんなに、お醤油をかけちや。

おれは、子供の時分、よく醤油を、飯にかけて食つたよ。

毒だわ。

妻 夫 奥前は、なんでも、毒にしちまふね。

そこで、その夢だ。

おれは、あてもなく、

その森の中へ、はひつて行つた。

毎日、繪にかいた、その森さ。

夜なんだよ、それがね。

妻 夫 それより、こつちのが漬かり加減よ。

夫 夜なんだ、それが……

奥へはひつて見ると、

森は――その繪にかいた森は、

とてつもなく、大きな森なんだ。

露西亞か、南米か……

そんな所に在りさうな

人跡未到の大森林さ。

(何か云はうとする)

妻 夫

まあ、黙つて聽いてろ。

夜なんだぜ、それが……

おれは怖いとは思はなかつた。

ちつとも怖いとは思はなかつた。

ただ、むやみに、悲しかつた。

おれは、不圖、自殺を思ひ立つた。

妻 もう澤山、そんな話は……。いいの、あなた、そんなにゆつくりしてゐて……。

夫 いいから、しまひまで聽け。
自殺を思ひ立つた。

そこで

一本の樹の枝を見つけて、
それへ帯をひつかけた。

頭の上で、その兩端を結びつけ、

いよいよ

首を吊らうとしたんだ。

(顔をそむけ) あなた!

夫 いいか、

するとだよ……

すると、誰かが、後ろから、おれの肩を叩くぢやないか。

人がゐたの。

妻 人なもんか。可愛い娘さ、それがね、十二三の……。

笑ひながら、おれの顔を見てるぢやないか。

問。妻は夫が膳の上に置いた茶碗を取つて再び手に持たせる。

見てるんだよ。

どつかで會つたことがあるなあ——

さう思ひはしたが、どうしても思ひ出せない。

あとで、わかつたの。

夫 待て待て。

(急いで飯をかきこみ)

すると、向うから、馴れ馴れしく

——なにしているの——つて訊くんだ。

おれは

ブランコをこしらへてるんだつて云ふと、

——ぢや、一緒に乗つて、遊びませう——つて云ふから、

おれは

帯が、これぢや、短か過ぎるつて云つたんだ。

(吹き出す) そんな……。

(眞面目に) さう云つたんだ。

問。

夫 妻

すると

——そんなら、あたしのを繋ぎませう——つて
メリンスの、赤い帯をほどくんだ。

妻 (笑ふ) いやよ。
夫 ほどくんだよ。

問。

仕方がないから
ブランコをこしらへて、
二人で乗つたよ。

問。

木の幹がぐらぐらツと揺れる。
頭の上で、だしぬけに、けたたましい羽ばたきが聞えたと思ふと……
森中の鳥が、一どきにガヤガヤと啼き出した。

二人は

思はず、ブランコの上で抱き合つたさ。

(やや暗い顔になり) もう、お茶……？

妻 お茶だ。

問。

お茶だけれど……

それから先さ、面白いのは……。

妻 ぢや、その先は、今夜ね。もう、お靴を穿く時間よ。

夫 今日は、ブルドックにしよう。磨いてあるね。

(起ち上つて洋服を出す)

妻 (それとなく、妻の方を見ながら) その時だよ。その娘の顔を、よくよく視たのは。

夫 わからない。が……誰かに似てるんだ。

妻 どこかで見えたか、會つたか、話をしたか……。

(靴下を検めながら) 今日は、どこへも上らないでせう。

夫 上らない……つもりだ。む、待つてくれ……よし、上らない。

兎に角

何時か、どこかで、どうかした女なんだ。

妻 誰だと思ふ？

夫 わかつてますよ、そんなこと。さ、また、待つて頂くのは、お氣の毒ですわ。

妻 誰だと思ふ？

夫 誰でもよござんすよ。

妻 あなたは、いつでもよ……朝の忙しい時に限つてそれなんですもの。

夫

晩なら、もつと、ゆつくりするでせう。
ゆつくりする。

しかし、もう印象が新鮮でない。

頭の後ろの方が、まだ、夢に漬かつてゐるやうな朝の氣持……

こいつは、晩まで、もたないよ。

事務所の、埃臭い空気を吸ふと、もう駄目だ。

恐ろしいものさ。

歸つて来て、お前の顔を見ると、それや、元氣は出る。

元氣は出る……が、ただそれだけだ。

お前は、あんまりはつきり見えすぎるよ。

問。

しかし、もう着換へる。

カマキリの奴、今日は遅いぢやないか。

茶を一息に飲み干し、起ち上つて、着物を脱ぎ始める。

(手傳ひながら) もう、これぢや暑いわね。

(喉の奥から妙な聲を出して唱ふ)

タララララララララ

夫妻

タララ タララ タララア

タララ ララ

タララ ララ

タララ ララララア

(服の塵を拂ひながら、優しく投げ出すやうに)

何を無茶苦茶歌つてるの!

無茶苦茶だ?

自分が知らない歌は、なんでも無茶苦茶か。

問。

ところで、お前は、わかつてると云つたね。

その娘が、似てゐるといふ女は、誰だ。

をかしいぢやないか……。

だつて、おれが、お前を初めて見たのは、お前が幾つの時だ。

十九か……

いや、二十か……

さうだね。

お前が十二三の頃は、どんな顔をしてゐたか、それが、おれに、わかる筈はないぢやないか。

妻 寫眞を見たでせう。

夫 さうか……
なるほどね。

お前は、また、恐ろしく、落つ着き拂つてるね。

痛快だよ……しかし……

疑ひも、そこまで、なくなれば。

序に、おれが、どんなに幸福かといふことも信じてほしいね。

あたしも……幸福よ。

夫 うまい、うまい、その調子……。

問。

いいかい、

その娘が、どこか、お前に似てるんだよ。

いいや、それより、お前そつくりなんだ。

つまりお前なんだ。

しかし、そこが、夢の面白いところさ。

おれは、さう気がついて、驚きもしなければ、まごつきもしない。

十六のおれは

夫 妻

（笑ひながら）まあ……

ブランコは

ひとりでに、揺れてゐるやうだつた……。

問。

木の葉を漏れてくる薄明りが、

仰向くたんびに

今度は

お前の顔を銀色に染めるんだ。

夫 妻

十二のお前を抱いて、
悠々

ブランコの上で夜を明かした。

はい、チョッキ。

ブランコは

力を入れないでも、樂にこげた。

問。

房々したお前の髪の毛が、前にかがむ度毎に、おれの顔に、もつれかかる。

お前は、それが面白いと云つて、わざわざ顔を近づけて来るんだ。

おれは
貪るやうにお前の眼を見つめた。
……お前は、やつぱり、笑つてゐるんだ。

(夫の肩に頭をもたせかける)

妻
が、やがて、お前は、うとうとと眠り出した。
おれも、うとうとと眠り出した。

長い沈黙。

それから先は、お前が知つてゐる通りなんだ。
もちろん、世界は、まるで違ふさ。

問。

さうさう、覚えてるかい……

あの翌朝、おれたちは、すぐ、この家へ引越して来たね。

なんだ、これや。(部屋ぢゆうを見廻す)

これでも、人間の住む家か……

人間が愛し合ふ家か。

問。

ところが、昨夜はさうぢやないんだ。

森だと思つたのは、宮殿さ。

ブランコのつもりでゐたのは、やはらかな、あたたかい、天鵝絨の吊床なんだ。

妻
吊床つて、なあに？

夫
吊床を知らないのか。吊床さ、そら……大人の寝る揺籃さ。

妻
宮殿なの……？

夫
うん……。

その宮殿が、決して、ありふれた、お伽噺式の宮殿ぢやない。

外の格子戸が開く音。

聲
おい、まだか。

妻
(慌てて夫の肩より離れ) それご覧なさい。また遅れたわ。

夫
(慌ててチョッキの鈕をはめながら) いやいや、遅れない。(大聲にて) なんだ、やつぱり行くのか。今日

日は休むのかと思つてた。

聲
どら……。

聲の主、茶の間に首を出す。

妻
あら、いけません。こんなところへ……。

同僚
おや、もう、歸つて来たのか。や、奥さん、お早う。

妻
いくらせかしても、これですの。

夫 丁度いい。まあ、話の先を聴け。その宮殿と云ふのが、決して、ありふれた、お伽噺式の宮殿ぢやないんだ。

妻 (上着を着せながら) そこは違ひますよ。もつと上……。

夫 宮殿といふ言葉は悪いかもしれない。一切の裝飾が、ただ、住むもののための裝飾なんだ。

同僚 面白いぢやないか。しかし、さういふ裝飾があり得るかね。

夫 あり得るさ。第一、吊床が奇抜なんだ。そのブランコさ、つまり……。

同僚 どのブランコ……。

夫 どのつて……。

妻 いやな片桐さん、ほん氣になつて聞いてらつしやるわ。(夫に) およしなさいよ、もう、あなた。

同僚 一體、なんの話だい。

妻 夢なんですよ、この人の……そら、例のですよ。

夫にハンケチ、時計、金人などを渡す。

同僚 なあんだ、さうか。

夫 君は、しかし、夢の面白さがわかる男だ。ただ、自分では、一向、見ないやうだね。

同僚 見ない。ところで、奥さん……。

夫 君は、ブランコに乗つたことがあるか。

同僚 ないよ。實はね……。

夫 よしよし、その話は後で聴く。昨夜の夢といふのはかうなんだ。

巻煙草に火を點けながら。

おれが、まだ、十六七の頃……世の中が、變に、かう、寂しい頃だ。

支那の方に行きながら。

それでゐて、いろいろのことを、知るともなしに、覺える頃だ。

姿が消える。

同僚 實はね、君、弱つたことになつたんだ。

夫の聲 弱くことはないぢやないか。

妻 (支那に出る)

同僚 (起ち上らうともせず、言葉つきは夫に、心持は妻にと云つた工合に) いや、それがね、急に、國から、お

やぢがやつて来るつて云ふんでね、やつて来るのは、かまはないが……。

夫の聲 さ、行かう、行かう。

同僚 行くさ。そこで、どうでせう、奥さん、今晚だけ……。

夫の聲 いいよ、いいよ、どうにかなるよ。さあ……。(同僚の手を引張るらしく) おれの夢を聴いてからにしろ。

同僚 (起ち上る。姿がかくれる) それがね、奥さん……。

夫の聲 よし、よし、こいつの知つたことぢやない。さ、出ろ、出ろ。
妻の聲 まあ……（と、何かに驚いて）行つてらつしやい。

格子の閉ぢる音。

妻 （現る。長火鉢に向ひ頬杖をつく。ひとりでに、微笑がうかぶ）

夫の聲 （やや遠く）そこで、おれは十六の少年だ……。

世の中が

變に……

おい、どこへ行くんだ。

同僚の聲 一寸、待て……急用だ。

夫の聲 こん畜生……早く、しちまへ。人が来るぞ。

どちらから始めるともなく、二人の調子外れな口笛が、一時、纏れるやうに聞えてくる。

— 幕 —

大正十四年四月

紙風船 一幕

晴れた日曜の午後——庭に面した座敷。

夫

(縁側の藤椅子に倚り、新聞を読んでいる)「米國フラー建材會社のターナー支配人が一日目白文化村を訪れて、おおロシアンゼルスの縮圖よ!と申しましたやうに、目白文化村は今日瀟洒たる美しい住宅地になりました」

妻

(縁側近く座蒲團を敷き、編物をしてゐる)なに、それは。

夫

(讀み續ける)「四萬坪の地區には、整然たる道路、衛生的な下水道電熱供給装置、テニスコート等の設備があり、多くの小綺麗なバンガローや莊重なライト式建築、さては、優雅な別荘風の日本建築などが、富士の眺めや樹木に富む高臺一帯の晴れやかな環境に包まれて……」(新聞を投げ出し)

妻

いいから、川上さんそこへ行つてらつしやいよ。

夫

是非行かなくつてもいいんだよ。

妻

あたしは、思ひ立つた時すぐでなければいやなの。

夫

散歩か?

妻

散歩でもなんでも……

問。

夫 散歩でもなんでもつたつて、ほかに何かすることがあるかい？

妻 ないから、それでいいぢやないの。

夫 あ。

妻 川上さんとこへいらつしつたらどう、そんなこと云つてないで。

夫 もう行きたくないよ。

妻 行つてらつしやいよ、ね。

夫 行かないよ、お前のそばにゐたいんだよ。わからない奴だな。

妻 わかつてますよ、憚りさま。

問。

夫 あああ、これがたまの日曜か。

妻 ほんとよ。

夫 (また新聞を拾ひ上げ、讀むともなしに) かういふ場合の處置なんていふことを、新聞で懸賞募集でもしてみたら、面白いだらうなあ。

妻 あたし出すの。

夫 (新聞に見入りながら、興味がなささうに) なんて出す？

妻 問題はなんていふの？

夫 問題か……問題はね、結婚後一年の日曜日を如何に過すか……。

妻 それぢや、わからないわ。

夫 わからないことはないさ。ぢや、お前云つてみる。

妻 日曜日に妻が退屈しない方法。

夫 そして、夫も迷惑しない方法……。

妻 いいわ。

夫 名案があるのか。

妻 あるの。まづ女は、朝起きたら、早速お湯に行つて、ちゃんとお化粧をすまして、着物を着更へて、ちよつとお友達の處へ行つて來ますつて云ふの。

夫 すると……。

妻 すると、男は、きつといやな顔をするにきまつてるでせう。

夫 きまつてやしないさ。

妻 あなたのことよ。

夫 おれがいついやな顔をした？

妻 しないの？

夫 まあいい、それからどうする？

妻 いやな顔をするでせう。さうしたら、かう云ふの——實は、あんまり行きたくもないんだけ

れど、うちでぶらぶらしてたつていふことが、後でわかると具合が悪いから……それが、會ふたんびに、一度遊びに来い、日曜なら主人もゐるし、一緒に芝居にでもつて、さう云はれるんでせう。今日は、どうせあなたもうちにゐて下さるんだし、ちよつと行つて来ようと思ふの。それとも、何かご都合でもあればつて、優しく訊いてみるの。それとなくよ。

夫 それとなくね。いや、別に、おれの方はかまはないが、お前がゐなくつて、晝飯はどうする？

妻 お晝は、お茶漬の用意をしておきました。

夫 晩は？

妻 晩は、出がけに「あづまや」へ寄つて、親子でもさう云つておきませう。

夫 また親子か。歸りは遅くなるだらう。

妻 さうね、まあ、はつきりわからないけれど、十時になつたら、お床を敷いて寢てて頂戴。

夫 金は持つてるかい？

妻 それがもう、すつかりなの。

夫 ぢや、これを渡しとかう。さ、十圓。

妻 ありがたう。

夫 夜風はもう寒いよ、襟巻を持つてけ。

妻 ええ。

夫 さて、おれは、これからゆつくり本でも讀まう。湯だけ沸くやうにしといてくれ。客が来たら、ビスケットの残りがまだあると……鼈も今日は剃るまい。あああ、長閑な日曜だ。

妻 (黙つて下を向いてゐる)

夫 どうしたい？

妻 あなたは、もう駄目。

夫 どうして？

妻 どうしてでも。

夫 (新聞を投げ出し) さうか、それぢや、お前が若し男だつたら、さういふ時、どうする？

妻 さういふ時つて……？

夫 止めるかい。

妻 止めるわ、なんとか云つて。

夫 なんて云つて止める。

妻 是非行かなくつても濟むんなら、今日はおれと芝居をつきあはないか、とかなんとか……。

夫 なるほど、つきあはうつて云はれたらどうする？

妻 行けばいいわ。

夫 行けばいいさ。しかし、行きたくなかつたらどうする？ 行きたくつても、事情が許さなかつたらどうする。今日見たいに。

妻 ぢや、芝居が活動になつたつていいぢやないの。
 夫 活動か……あれや、お前、夫婦で見に行くもんぢやないよ。
 妻 なぜ。
 夫 誰にでも訊いて見ろ。
 妻 それがいけないの、あなたはほかの女と違ひますよ。
 夫 違ふだらう。違ふから、なほあふない。
 妻 何を云つてるの？
 夫 やつぱり出るといふものは、止めない方がいいやうだな。
 妻 さうね、だから行つてらつしやい、川上さんとこへでも、なんでも。
 夫 しつこいな。今朝お前はなんて云つた。おれが、川上の所へ行つて来るつて云つたら、川上さん川上さんつて、毎日社で顔を合はせてる人を、なんだつてさう戀しがるんでせうね、日曜ぐらゐ一日うちいらつしつたつて損はないでせう。なんのためにあたしがかうしてゐるんです。さう云つたね。
 妻 それがどうしたの？
 夫 どうもしないさ。問題は、お前が、なんのためにかうしてゐるかつていふことだ。
 妻 (やむを得ない) あら、かうしてゐてはいけないの？
 夫 かうしてゐるにも、かうしてゐるやうがあるぢやないか。おれが新聞を読む。お前は編物をし

はじめめる。おれが溜息を吐く。お前も溜息を吐く。おれが欠伸あくびをする。お前も欠伸をする。おれが……。
 妻 だから、どつかへ行きませうて云へば、あなたが、なんとか、かんとか云つて……。
 夫 よし、それはわかつた。だが、おれたちは、日曜にどつかへ行くために、夫婦になつたわけぢやあるまい。うちにゐたつて、もう少し陽氣な生活ができる筈だ。
 妻 あなたが話をなさらないからよ。
 夫 話……どんな話がある？
 妻 話は「する」ものよ。「ある」もんぢやないわ。
 夫 なんだ、それや……哲學か。よし、話は「する」ものとしておかう。お前だつて話をしないぢやないか。
 妻 うるさいつておつしやるからよ。
 夫 何かしてる時に喋しゃべるからさ。
 妻 うそよ、寝てからでもよ。
 夫 ねむいからさ。
 妻 (じんまり) ほんとを云ふと、あたしは、黙つてあなたのそばにゐさへすれば、それで満足なの。あなたが、もう少しあたしに氣をつけて下さると、それこそ、どんなにいい方だかしれないんだけれど……。

夫 (小鼻をうごかし) 晩飯の菜はなんだい。

妻 (快活に) 未定よ、今日の成績次第。

夫 (その氣持に乗り兼ねて) お前はいつまでも女學生だね。

妻 どういふ意味。あたし、いつでもさう思ふの。日曜なんか、それや餘裕がある時は、お芝居を見に行くなり、何かおいしいものを食べに行くなり、さういふこともあつていいけれど、そんなことは第二として、もつと家庭らしい楽しみが、いくらだつてあると思ふの。お庭だつても、これぢやあんまりだわ。あなたが手傳つて下されば、ちよつとした花壇ぐらゐこしらへるのは、それこそなんでもないわ。今頃、コスモスなんかがいっぱい咲いててご覽なさい。外から見ても綺麗ぢやないの。

夫 だからお前は、女學生だよ。

妻 そんなら、あなたは小學校の生徒よ。

夫 (笑ひながら) さういふところがあるかい？

妻 あつてよ。

夫 おい、散歩しよう。

妻 もう遅いわ。

夫 その邊でもいいや。

妻 どこ、井の頭？

夫 多摩川でもいい。

妻 そんならもつとゆつくりした時にしませうよ。どつかでお晝でも食べるつていふやうにしないで、つちや、つまらないわ。

夫 お前のところにいくらある？

妻 もういや、今日は、そんな話は。

夫 (指を折りながら) 十六、十七、十八、十九……。

妻 それこそ、朝から用意をして、朝ご飯を食べたら、すぐ出かけるくらゐでなければ……。

夫 前の晩に話をきめといてね。

妻 さうよ、どこならどこへ行くつて。

夫 日歸りで、鎌倉あたりへ行くのもいいな。

妻 行きたい所があるわ。

夫 さうするつていふと、東京驛を八時何分かに出る汽車がある。

妻 二等よ。

夫 當り前さ。早くあの窓ぎはの向ひ合つた席を占領するんだなあ。おれのステッキとお前のパソルとを、おれが、かう網の上のせる……。

妻 あたし、持つてる方がいいの。

夫 さうか。後からはひつて来る奴らは、おれ達を見て、ははあ、やつてるなと思ひながら、な

妻 馬鹿ね。
 なるべく近くに席をとるに違ひない。

夫 汽車が動き出す。

妻 窓を開けて頂戴。

夫 煤がはひるよ。あれご覽、濱離宮の跡だ。

妻 まあ。

夫 品川、品川、山手線乗換。

妻 早いね。あたし、キャラメルを買ふの。

夫 よし、おい、キャラメル。

妻 あなたはいかが？

夫 もらはう、大森は通過。もうぢき社長の家が見える。

妻 あれがさう、けちな家ね。

夫 けちな家だ。蒲田、川崎は飛ばして横濱と。こんな所にも用はない。保土ヶ谷、戸塚、さあ大船へ来た。

妻 あたし、サンドウキッチを買ふの。

夫 よし、おい、サンドウキッチ。

妻 あなたはいかが？

夫 うむ、もらはう。

妻 いやよ、一人でたべちゃ。

夫 さ、降りる用意をした。下駄をはいて……。

妻 坐つてなんかもせん、そんな……。

夫 まづ行くとする、八幡宮だらうな。知つてるか？

妻 知つてますよ。それより、海岸へ行つてみませうよ。

夫 それもよからう。ええと……。

妻 自動車を呼びばいいわ。

夫 さうか、おい、タクシー。さあ、お前へ乗れ。

妻 ぢや、ご免あそばせ。

夫 そこで、煙草に火をつけると……。

妻 その前に、行先をおつしやいよ、運転手に。

夫 海岸でいいぢやないか。

妻 をかしいわ、海岸までなんて。ちよつと、運転手さん、海濱ホテル。

夫 海濱ホテルは、閉まつてやしないか？

妻 うそおつしやい。

夫 しゃうがない。行つちまへ。ブウ、ブウ、ブウ……。

妻 何よ、それや。もう来たのよ。
 夫 やれやれ、ぢや、見晴しのいい部屋へ通してくれ給へ。
 妻 食堂でいいぢやないの。
 夫 さうさ。だから、お前、何か注文しろ。
 妻 あなたは？
 夫 おれはなんでもいい。
 妻 ぢや、カルピスを二つ、冷たいのね。
 夫 おい、君、君。晝まではまだ間があるから、少しその邊を歩いて来よう。十二時には歸つて来るから、何かうまいものを食はしてくれ。
 妻 さう。
 夫 それから當分滞在したいんだが、いい部屋があいてるか。バスルームのついた……。
 妻 バスルームつて……お風呂場ね。
 夫 シッ。あ、さう。ぢや、それにしよう。いや、見ないでもいい。それから君のうちに飛行機はないの？
 妻 あなた。
 夫 ない。それぢや仕方がない。歩いて行かう。さ、おれのステッキは……？
 妻 また汽車の中に忘れて来やしない？

夫 いや、ボーイに渡した。ああ、それだ。
 妻 どつちへ行くの？
 夫 向うに見えるのが江の島だ。
 妻 いい景色ね。
 夫 氣をつけないと轉ぶよ。どら、手を曳いてやらう。
 妻 人が見るわよ。
 夫 見る奴が損をする。くたびれたか。ぢや、この邊で一休みしよう。なんなら、海へはひつてもいいよ。
 妻 あたし、はひるわ。
 夫 はひれ、うむ、お前も裸かになると、なかなか好い體格だ。あんまり遠くへ行くな。大丈夫よ。
 夫 待て待て、そこで、さうして見てる、寫眞を一枚取つておかう。さ、いいかい。うむ、これやすってきた。(だんだん興奮して来る) 今まで、お前が、こんなに美しく見えたことはない。どうだい、その形は……。なんといふすばらしい色だ。さうさう。やあ、お前の髪の毛は、そんなに長かつたのか。お前の胸は、そんなにふつくらしてゐたのか。あ、笑つてるね。こつちを向いてご覽。うん、それがお前の眼だつたのか。ああその口は……。(われを忘れたやうに叫ぶ)
 妻 (はじめて顔を上げ、たしなめるやうに) あなた。

長い沈黙。

夫　ここへ来てみる。

(笑つてゐる)

妻　(両手を差出し) 来てご覧。

いや。

夫　来てご覧つてば。

妻　(起ち上り、夫の両手を取り、それを振りながら) あなたには、ちやうどいつていふところがないのね。

夫　どういふふうに? (妻を引寄せようとする)

妻　いや、そんなことしちや。

夫　(妻の手を取つたまま) お前は、ほんとにおれがいやになりやしないか。おれとかうしてゐるのが

……

妻　あなたはどうかの?

夫　おれは、お前とかうしてゐることが、だんだんうれしくなつてきた。それは事實だ。しかし、お前がなくなつた時のことを考へると、立つても坐つてもゐられないやうな氣がする。それも、ほんとだ。

妻　どつちがほんとなの?

夫　どつちもほんとだ。(間) だから、おれは、こんなことぢやいけないと思ふ。が、どうにもな

らないんだ。(間) お前が、さうして、おれのそばで、黙つて編物をしてゐる。お前は一體、それで満足なのか。そんな筈はない。おれの留守中に、お前は、どこか部屋の隅つこで、たつた一人、ぼんやり考へ込んでゐるやうなことがあるだらう。おれは外にゐて、お前のその淋しさうな姿を、いくども頭に描いて見る。百圓足らずの金を、毎月、如何にして盛大に使用するか、さういふことにしか興味のないおれたちの生活が、つくづくいやになりやしないか。今更そんなことを云つてもしかたがないと諦めてゐるかもしれない。しかし、お前は決して理想のない女ぢやないからね。おれは、今のお前がどんなことを考へてゐるか、それが知りたいんだ。かういふ生活を續けて行くうちに、おれたちはどうなるかつていふことだらう。違ふか。それとも、お前が、娘時代に描いてゐた夢を、もう一度繰り返して見てゐるのか。

あなたは馬鹿よ。(笑はうとしてつい泣顔になる)

妻　人間はみんな馬鹿さ。自分のことがわからずにゐるんだ。さ、もうよさう、こんな話は。

夫　でも、久しぶりよ、泣いたのは。

夫　おれが、日曜日にお前をはふつて外へ遊びに出る。それをお前が不満に思ふのは當り前だ。たまには氣晴らしもしたいだらう。活動ぐらゐなんでもない。夕飯でも食つたら、出かけるか。

(うなづく)

妻　行かう。そんならそれで、早く風呂へでもはひつて来い。

妻 (涙を拭きながら) 今日はいいの。

夫 どうして?

妻 あなたこそ、今日で三日目よ。

夫 うむ、少し風邪気味なんだけれど……まあ、今日はよさう。それより、今が三時半だから……さうだ、夕飯までにちよつと出て来るからね。

妻 (もとの座に着き、恨めしげに) どこへいらつしやるの?

夫 なに、ぢき歸つて来る。

妻 (夫の顔を見つめ、何か云はうとして、急にうつむき) ええ、いいわ。

夫 (もぢもぢしながら) 川上さんところぢやないよ。

妻 (氣まげに) どこだつていいことよ。

夫 (妻の傍にしゃがみ) 玉突だと思つてるんだらう?

妻 (その方は見ずに) いいから、行つてらつしやいよ。

夫 怒つたのか。

妻 (また泣いてゐる)

夫 (途方にくれて) どうしたんだい、一體?

妻 あたしが悪かつたの。

夫 いいも悪いもないぢやないか。だから、後で活動へ行くんだよ。

妻 (溜息を吐き) もうわかつたの。

夫 何がわかつたんだい?

妻 もういい加減に諦めるわ。

夫 なにを……。

妻 ご免なさい。

夫 變だぜ。

妻 をかしたもののね。よその奥さんたちは、旦那さんがお留守だと、けつく氣樂だつてよろこん

でゐるの。だけど、あたし、それが不思議だつたの。

夫 それや、不思議なのが當り前さ。

妻 それがけふ、やつと不思議でなくなつたの。

夫 え。

妻 男つていふものは、やつぱり、朝出て、晩歸つて来るやうに出來てゐるのね。

夫 (苦笑する)

妻 男つていふものは、家にゐることを、どうして恩に着せるんでせう。女は、それがたまらな

いのね。

夫 なにも恩に着せるわけぢやないさ。

妻 だから、行く所があつたら、さつさと行つて頂戴。その方が、ずつと氣持がいいわ。

夫 (また椅子にかけ、新聞を読み始める)
 妻 あたし、日曜がおそろしいの。
 夫 おれもおそろしい。

問。

妻 あなたは、あんまり、あたしを甘やかし過ぎるのよ。(編物をし始める)
 夫 さうでもあるまい。
 妻 いいえ、さうなのよ。
 夫 むづかしいもんだな。
 妻 よそのうちをご覧なさいよ。
 夫 見てるよ。
 妻 あの通りになさいよ。
 夫 出来ないよ。
 妻 女はつけ上げるものよ。
 夫 知つてるよ。
 妻 そいぢやいいわ。
 長い沈黙。
 夫 おれたちは、これで、うまく行つてる方ぢやないかなあ。

妻 もう少しつていふところね。
 夫 金かい。
 妻 さうぢやないのよ。

長い沈黙。

夫 犬でも飼はうか?
 妻 小鳥の方がよかない?

長い沈黙。

夫 (欠伸をする)
 妻 (欠伸をする)

問。

夫 おい、話をしてやらうか。
 妻 ええ。
 夫 昔々ある所に、男と女があつた。男は學校を出るとすぐ會社に勤めた。女は、まだ女學校に通つてゐた。二人は毎朝、同じ時刻に、郊外の同じ停車場で顔を合せた。そのうちに、二人は、お辭儀をするやうになつた。男が早く來た時には、男は女の來るのを待つた。女が早く來た時には、女は……。
 妻 先へ行つてしまつた……。

夫 さういふこともあつた。

この時「あらッ」といふ女の子の叫び聲が聞える。庭の中に、大きな紙風船が轉がつて来る。

夫 (新聞を投げ出し、庭に降りて風船を拾ふ)

妻 (獨言のやうに) 千枝子ちゃん、おうちにゐるの、けふは?

夫 (黙つて風船をつきはじめる)

妻 およしなさいよ、あなた…… (大きな聲で) 千枝子ちゃん、いらつしやい。をばちゃんと風船

をついて遊びませう。

夫 (相變らず一生懸命風船をつく)

妻 (起ち上り、玄關から下駄を持つて來て庭に降り) あなた、駄目よ、そんなに力を入れちゃ…… (子供が垣

根の向うにゐるらしい。それに) さ、をばちゃんときませう。(かう云ひながら、夫のついてゐる風船を奪ひ

取るやうにしてつく) 千枝子ちゃん、あつちから廻つていらつしやい。

(妻の後を追ひながら、じれつたさうに) どら、貸してみろ、おい……。

— 幕 —

大正十四年五月

驟 雨 一 幕

朋子
讓
恒子
家政婦

六月の午後
洋風の客間を兼ねた書齋

朋子が割烹着を脱ぎながら、慌だしくはひつて来る。その後から、家政婦が、何か云ひたさうにしてついて来る。

朋子 さうよ、あれはあれでいいの。(割烹着を家政婦に渡し、机の前に坐る)あと、ハンケチだけでせう。暇を見て、しといて頂戴。こがさないやうにね。ああ、それから……その前にちよつとお使ひに行つて来てくれない？ その八百屋に苺が出るか見て、もし、出ても良いのがなかつたら、驛の前まで行つてね、上等のを一箱取つて来て……。

家政婦 おいくらぐらゐのを……。

朋子 いくらでもいいことよ、良いのでさへあれや……。 (ペンを取り上げ、引出をさがしながら) あたしちよつと、端書を書くから、それもついでに入れて来るのよ。さ、支度をして頂戴。(端書を書く) ええと……。

家政婦去る。長い間。

朋子 あ、芳澤さん……、今朝来た端書をここへちよつと……。 状差に差してあるでせう？ 續端書よ。

家政婦 (端書を持って来る) これでございますか。

朋子 (見ずに受取り) ええ、それ……(見て) これぢやないの。けさ、来たのがあるでせう。(笑ひながら) いやね、これは……。

家政婦、これも笑ひながら去る。

海岸の寫眞よ、蒲郡つて書いてある……。

家政婦 (繪端書を見ながら現る)

朋子 (引つたくるやうに) どちら……ええ、これよ。

(間)——「二人とも、大層氣に入り、四五日逗留の豫定……」か。

家政婦 は？

朋子 こつちのこと……。早く支度して頂戴。

家政婦去る。

朋子 (書きながら)「……それでは、今のうちゆつくり遊んでおおきなさい。旦那さまによるしく……」と。芳澤さん、さ、これを持つて……。まだなの、支度は……？あ、さうさう、お風呂を見といてね、行く前に……。もうお歸りになる時分だから……。

家政婦 (奥から) もうちゃんと沸いてをります。

朋子 さう。(間) そいぢや、なにしてるの、あんだ。

家政婦 ちよつと帯をし直してをりますんす。

朋子 帯なんか、いいぢやないの、いちいち……すぐそこなんだもの……。

玄關の戸が開く音、朋子出て行く。間。——

讓 (現れる。機械的に机の上の繪端書を取り上げ、それを讀む)

朋子 (續いて現れる) すぐお風呂になさいます？

讓 (返事をしない。そのまま、奥に去る)

朋子 (やや暗い表情。ぐつたりして椅子による。が、すぐに氣を取り直して起ち上る)

讓の聲 おい。

朋子 (黙つて奥にはひる)

長い間。

玄關で「ご免なさい」といふ女の聲。續いて、朋子の「あら……」といふさも意外らしい叫び聲。

朋子の聲 どうしたの……。どうして歸つて来たの。ひとり？(問) けさ見たわ。(問) ええ、四日逗留するつていふから、まだなかなかだと思つてたのに……。 (問) さう、まあお上んなさいよ。(問) うちぢや今歸つたとこ。(問) いいのよ、そんなこと……。

朋子、續いて恒子現る。——恒子は、やや疲れてゐるらしい。

朋子 どうかしたんぢやない？ いやね、笑つてばかり……。

恒子 (腰かけながら) まあ、ちよつと休まして頂戴。今着いたとこなの。

朋子 そいで……？

恒子 あの人？(意味ありげな微笑) 今云ふから待つて。(溜息) ほんとにお邪魔ぢやなくて……。

朋子 (いぶかしげに) いや、あたし。そんなに笑つてばかしるちや……。恒ちゃん……。
 恒子 せつかちね、姉さまは……。 (かう云ふと、急に、姉の視線を避け、ハンケチを取り出す。眼に涙がたまつてゐる。それが、われながらをかしいといふふうには、また笑はうとするが、もう我慢ができない。ハンケチを眼にあてると、いきなり肩をゆすつて泣く)

朋子 (途方にくれて) をかしなひとね……。どうしたつていふの。(妹の肩に手をかける)
 恒子 ……。

朋子 泣いてたんぢや分らないぢやないの。あの人がどうかしたの。早くおつしやいよ。

恒子 ご免なさい。姉さまの顔を見たら、つい悲しくなつたの。(間) あたし、よつぽど黙つてよ
 うかと思つたの。黙つて、辛抱しようかと思つたの……。だけど、もう駄目……。あんまり
 なんですもの……。あたし、うちへ歸るわ。(間) どうしても、いやなの。

朋子 どういやなの。

恒子 どうつて……。なにかも。

長い沈黙。

姉は、うなだれた妹の横顔を、まじまじと見入つてゐる。

朋子 喧嘩したんでせう？

恒子 いいえ、そんなことぢやないの。(間) やつぱり、いけなかつたわ。

朋子 やつぱりいけないいつて……。前から何か……。

恒子 さうぢやないけど、そら、行儀が悪いつて云つてたでせう？

朋子 そんなこと……？

恒子 そればかりぢやないの。ええ、つまりさうだけど、それが、ただ行儀が悪いんぢやないの。
 あたし、つくづく愛想がつきたわ。

朋子 男つてみんなさうよ。

恒子 そら、いつかうちへ来た時、母さまの前で欠伸あくびをしたつて、母さまがあとでおこつてたで
 せう？ ああいふことがのべつ幕なしなの。それや、欠伸なんか、あたしの前でしたつてな
 んとも思やしないけど、他人ひとがある時に、そばでハラハラするやうなことを平氣でするのよ。

朋子 どんなこと……？

恒子 いちいち云へないの、あんまりいろんなことで……。汽車へ乗つてからだつて、さうだわ。
 いきなり、腰掛の上へ脚をのつけて、ぐうぐう眠ねるのよ。それが、發たつた日からさうよ。

朋子 話もしないで……？

恒子 話なんかするもんですか。まるでなんのために旅行するんだかわかりやしないわ。みんな
 が變な顔して見てるの。さうでせう、ハンケチもかけないで、口をあいて眠つてるんですも
 の。

朋子 (笑ひをこらへて) 式やなんかでくたびれたんだわ。

恒子 そいぢや、あたしはどう……。久しぶりで、あんな帯を締めてさ。

朋子 あなたは違ふわよ、女ぢやないの。

恒子 もう、姉さまも、さういふことを云ふやうになつてらしやるのね。

朋子 ……。

恒子 それから宿屋についてからでも、女中なんかにはばかり話しかけて——常談を云つたり……それや變なの。ご飯をたべる時なんて、あたし、お給仕してる女中に恥かしくつて……。だつて、云ふことがげすなの、——ネエさん、東京だらう？ どうも田舎の女ひとにしちや、様子がイキだと思つた——かうなの。女中の云ふことがいいわ。——旦那も東京ですか——だつて。さうすると、變な手つきをして頭をかくの。——いや、逆襲は恐れ入るなあ——つて。どうでせう、いやね。

朋子 恒ちゃんもむづかしいわね。さういふことを云ふもんよ、男つて……相手次第ではね。

恒子 兄さまもおつしやつて……？

朋子 ええ……さあ、兄さまはどうだか……。

恒子 おつしやらないわよ。それからもつとひどいことがあるの。昨夜なの、それは……。——蒲郡つて、何縣？ つて訊いたら——何縣だと思ふつて聞きかへすの。姉さま知つてらつしやる？ 知らないわねえ。だから、いいかげんに三重縣？ つて、ただ云つてみたの。さうしたら、笑ひながら、——そいぢや、どの邊にあるか、日本の地圖を書いて、圓をつけて見ろつて云ふの。あたし、そんな女學校の試験みたいなこと、いやだつて云つてやつたの。さう

したら、紙と鉛筆とを出して、どうしても書けつてきかないの。しまひに、日本地圖も書けないのかつて、それや、しつこく云ふの。だから、あんまり續でせう。日本の地圖ぐらゐ書けますわつて、そら、よく書いたわね、あの通り書いてやつたの。さうすると、本州だけしか書かないうちに、——なんだ、それや胡瓜かつて……。(笑ひながら泣き出す)

朋子 え？

恒子 胡瓜かつて、云つたわよ。(また泣く)

朋子 (腹立たしさと、可笑しさを制しながら) 随分、失禮ね。

恒子 あんな人のところへ、どうして嫁い氣になつたかしら……。デリカシイつていふものがちつともないの。(間) 朝、顔を洗ふ時、どういふふうにするか知つてて……。(溜息) それから、服を着る時……手を前後左右に振り廻すの……。洋服を着るなら、洋服の着方ぐらゐ覺えればいいのに、そのさまつたら、見てゐられないの。

朋子 さも憎らしさうね。さう云つたもんぢやないわ。變に氣どつてる男なんかよりは、さつぱりしていいぢやないの。

恒子 ところが、さつぱりなんかしてないの。なぜつて云へば、その氣どらないところを氣どつてるわけなの。わかる？ おれは氣どつてなんかゐないぞつて、いふところを見せるつもりなんでせう。それが、もう一種の氣どりだつていふことを知らずにゐるの。だから、するこゝと云ふことに、いちいちこだはりがあつて、そばにゐると、じれつたくなるの。ふんて云

ひたくなるの。

朋子 さうかしら……。

恒子 さうさう、式ん時だつてわかるわ。どう、あの、なんでもないやうなふうのしかたは……。さもこんなことは面倒くさいつていふやうな様子をして、そのくせ、あれで、固くなつてるのよ。ほら、よくしらばくれた顔をするぢやないの。あれが、てれかくしよ。——へえ、僕があつた女と結婚するんですか。へえ、僕がこのお酒を飲むんですか。へえ、一緒に旅行をするんですか。まるでさういふ顔よ、あの顔は……。第一、停車場へ行くまで、行先をきめないなんて、あんまり人を馬鹿にしてるわ。母さんなんか、随分氣をもんでいらしたわ。いけど母さんが訊いても、——さあ、まだきめてありませんがね。まあ、行き當りばつたり、汽車の止つた所へ降りるんですな。どこつて別段見たい所があるわけぢやなし……。ハハハハ……。かうなんでせう。母さまはむろんだけど、赤羽の伯父さまなんか、横を向いて苦い顔をしていらしたわ。それも氣どりよ。無頓着ぶるのよ。却つてをかしいのに……。

朋子 あたしも、それは覺えてる。さういへば、變な人だと思つた。

恒子 それから、まだあるわ。東京驛で、みんな送つて来て下すつたでせう？ あん時、姉さまが、汽車の中へ花束を持つて来て、二人に下すつたでせう。それを見て、なんて云つたか覺えてらつしやる？

朋子 (キツパリ) ええ。——これどうするんですかつて……。そして、——厄介だなあ、持ちも

のになつて……。どうせすぐ萎れちまふんでせうつて……。

恒子 ね。わかるでせう？ バツが悪いのをごまかさうと思つて、わざと素氣ないことを云ふのね。それが、氣がきいてればいいけれど、それだけの頭はなし、つい、人の氣を悪くするやうなことを云つてしまふのね。

朋子 困つた人ね。しにくいわね。

恒子 輕蔑したくなるわ。可哀想になるのが、本當かもしれないけれど……。

朋子 さう云つちまつちや、また、なんだけれど……。

恒子 いいえ、いいのよ、姉さま。あたしはもう決心してるんだから……。

朋子 決心つて……？

恒子 だから、あたし、歸るのよ、うちへ……。

長い沈黙。

朋子 それや、あなた、思ひ切りが早すぎてよ。そんなもんぢやないわ。(間) 男つていふものは……。

恒子 もう澤山、そのお説教なら……。男つていふ者はどうなの……。誰がさうきめたの？ 姉さまも、やつぱりさうなのね？ ぢや、こんなこと、ご相談するんぢやなかつたわ。

朋子 恒ちゃん。まあ、もつと考へてみませうよ。それや、恒ちゃんの想像してたやうなものぢやなかつたかもしれないけれど、今聞いた、ただそれだけの話なら、そんなに、あなたが思

つてるほど、重大なことぢやなくつてよ。第一、あの人が、あなたを愛してゐないつていふ證據には、ならないぢやありませんか。

恒子 それがどうなの？ 愛されてゐるか、ゐないかは、第二の問題よ。

朋子 え？

恒子 第一の問題は、愛されて、幸福な相手かどうかつていふことだわ。

朋子 だつて、恒ちゃん、それはもう……。

恒子 初めからわかつてたつて云ふんでせう？ ええ、わかつてたわ。それが間違つてたらどうするの。間違つてなくつても、望んでゐたことが駄目だつたらどうするの。姉さまは幸福だから、あたしのことなんかおわかりにならないんだわ。(泣く)

沈黙。

朋子 (キッと) なに云ふの、恒ちゃん。こんなことを、あたしの口から云ふのはいやだけれど、一番あなたのことを心配してゐるのはあたしよ。だからこそ、かうして、どこよりもあたしのところへ相談に来てくれたんでせう？ だから、相談にのるわよ。いろいろなことを云つたり云はれたりしてみませうよ。怒つちや駄目よ。すぐ、あなたのやうに……。

恒子 姉さま。あたし、どうしても、このまま歸るのはいやよ。これだけと思つて、云はずにゐたけれど、姉さまがさうおつしやるなら、みんな云つてしまふわ。きつとびつくりなさるわ。あたしも、これだけは我慢ができないの。

朋子 ちよつと待つて頂戴。落ちついてものをおつしやいよ。云つてしまつたら、もう取り返しのつかないことがあるわよ。もちろん、姉さんに云つたからつて、それをまた誰に云ふつてわけぢやないけれど、あたしは、ただ、あなたが、自分の矜りを自分で傷けるやうなことをしないやうに、それだけのことを云つておきたいの。あなたに、今、冷靜になれつて云ふのは、無理かもしれないけれど、あたしだけは、せめて、度を失はないでゐなくつちやならないでせう？ あなたののためによ。さ、しつかりして頂戴。さうして、出来るだけ感情を交へないで、事實だけを聞かして頂戴。若し云つていいことなら……。

長い沈黙。

恒子 さうおつしやられると、云へなくなるわ。

朋子 やつぱり、云はない方がいいんでせう？

恒子 だつて、それを云はずにゐれば、姉さまに、あたしの氣持がわかつて頂けないんですもの。それに……云つたつてかまはないわ。どうせ圓く治まることなんかありつこないんですもの……。それはね、かうなの。

朋子 (起ち上り) すぐ来るわ。あなた、おなががすいてやしない？

恒子 いいえ。

朋子 でも、とにかく、あり合せでね。

恒子 いいのよ、姉さま……。あたし、これから、大久保へ歸るから……。

朋子 大久保へ……。どうして……。？ まあ、もう少しあたしの云ふことを聞いてから、ね。(出て去る)

長い間。

家政婦 (茶を運んで来る) いらつしやいませ。

恒子 (黙つて會釋する)

家政婦 ちつとも存じませんで……。 (茶を進める) もうお歸りになつたんでございますか。

恒子 ええ。

家政婦去る。

讓 (現る) やあ、失敬。もう歸つて來たんですか。早いぢやありませんか。

恒子 (挨拶に困つて) 東京が戀しくなつたもんですから……。

讓 新婚旅行なんでものも、これでだんだん形式的になつて行くんですね。まあ、云つてみれば、人がするからするつていふ程度の興味しかありませんね。しかし、それは、あとから感じることで、それをやつてる最中は、いささか夢中で、といふのが本當かもしれないな。

朋子 (現る) なにを獨りで饒舌つてらつしやるの。あのね、あなた……。 (と、夫の耳に口を寄せるやうにして、小聲で何か云ふ)

讓 (快活に) さうか。それはお邪魔をした。おや、まあ、ごゆつくり……。 (立ち上る) しかし、飯は一緒に食ふんだらう？

朋子 ええ、むろんよ。

恒子 あら、兄さま、よろしいんですの……。姉さま、ほんとに、兄さま、いらしつてもかまはないことよ。その方が却つていいわ。兄さまにも、一緒に聞いて頂くわ。そして、ご意見を伺はせて頂くわ。

朋子 さう……。あたしは、どうでもいいけれど……。 (二人の顔を見比べて) おや、兄さまにもめて頂きませう。どうせ、いざつていふ場合には、相談にのつて頂かなくつちやならないんだから……。 (腰をおろす)

讓 (わざと落ち着きを見せて) 何事です？ 一體、そんなに改まつて……。 (腰をおろす)

朋子 どう、あらましのことを先に云つといたら……？

恒子 ……。

朋子 でも、ちよつと、一口には云ひにくいわね。なんて云つたらいいかしら……。

讓 簡単に云へばわかるよ。なにか間違ひでも起つたのかい？

朋子 (恒子の方を見ながら) 間違ひつていふわけぢやないんですけれど……。そいぢや、あたしから云ふわ。ね、いいでせう？ かうなの。やつぱり、今度の問題なの。(問) 恒子の話では、どうもうまく行かないらしいんですの。それが、取り立てて、かういふことがあつたつていふよりも、性格的に合はないんでせうね。第一、若い女の氣持が、ちつともわからない人らしいわね。

譲 それや、しかし、お前……。

朋子 ええ、それを、今、あたしも、恒子に云つたんですけれど……まさか、こんなでもあるまいと思つてたらしいのね。母さまなんか、かげで心配してたんですし、あたしもそれとなく、恒子に注意したことがあつたくらゐですからね。でも、程度の問題になると、これやね、やつぱり、見損ひ……殊に、恒ちゃんの前でなんだけれど、さう悪い方にばかりとれないつていふ場合もあるし……一概に恒子を責めるわけにも行かないと思ふんですけれど……。あたしにも幾分の責任はあると思つてゐるんですわ。

恒子 そんなことありませんわ。姉さまはなにも……。

朋子 まあ、聞いてらつしやい。それで、恒子は、今になつてこんなことを云ひ出すのは不審みのやうだけれど、將來のことを、もう一度考へ直してみたいつて云ふんですの。

譲 もつと、具體的な説明を聴かうぢやないか。

恒子 でも……（姉の顔を見る）

朋子 いろんなことが重つてゐるらしいんですけれどね、それが……。さうね、どういふことから云つたらいいかしら……。ねえ、恒ちゃん、あなた、一番いやだと思つたことはなに？

一番辛抱ができないと思つたこと……。

恒子 それが、さつきお話ししようと思つたことなの。それを云はなければわからないから、やつぱり云ふわ。（間）それが昨夜なの。（間）宿屋で、偶然、あの人のお友達つていふ人に遇つ

たのよ。今まで聞いたこともない人なの。それが、晩方から来て、一緒にお酒を飲み出したの。それだけなら、まだいいの。二人とも酔拂つて、いつまでも大きな聲で饒舌つてるんでせう。あたし、あんまりだと思つたから、お隣の方のご迷惑になりやしないかつて、さう云つてみたのよ。さうしたら。「よけいな心配をするなッ」てどなるの。さうして、いきなり、どこかへ行かうつて、二人で出て行つたきり、いつまで待つても歸つて来ないの。一晩中、まんじりともしないで、あたし、待つてたわ。夜が明けてからよ、變な顔して歸つて来るの。さうして、あたしの顔を見て、にやにや笑つてるの。

長い沈黙。

朋子は、これも眼に涙をためて、夫の顔を見てゐる。

恒子 それでも、あたし、しばらくは黙つてゐたの。ただ、もう東京へ歸りませうつて、おとなしく云ひ出してみたのよ。すると、おこつたのかつて聞くの。いいえ、ただ、あたし、東京へ歸りたくなくなりました、なんなら、一人で歸していただきます、さう云つてやつたの。

沈黙。

恒子 ——歸りたけれや歸らう。しかし、あんなことはないんだよ。つき合ひなんだからねえつて、さも、あたり前のやうに云ふの。あたしは、あの人があんなにあやまつたつて、こればかりは免せないと思つてゐるんでせう。そこへもつて来て、あんまりな云ひ草だから、——あなたは、あたくしに恥かしいとはお思ひになりませんかつて、思ひきつて云つたの。

(間) さうすると、おれはなにも後ろ暗いことをした覚えはない。それをお前が疑ふのは、お前の勝手だ、かうなの。だから、あたしは、——いいえ、疑ふ疑はないぢやありません。ああいふなさり方は、あたくしを侮辱なさるばかりでなく、あなたご自身を侮辱なさるものですつて、まあ、さうむづかしくは云はなかつたけれど、さういふ意味のことを云つたつもりなの。そんな時は、もう、聲が出なかつたかもしれないわ。(間) だつて、胸が一つばいゝんですもの。

長い沈黙。

朋子 それだけ……云ふことは。

恒子 (うなづく)

朋子 あなたは、どうお考へになつて……?

譲 少し亂暴だね。

朋子 少しどころぢやありませんわ。それから、あの人はどうしたの?

恒子 どうもしないわ。それから、ひと口も口をきかないの。東京驛へ着くまで、二人とも、黙つたままよ……。ただ、うちへ寄つて来るつて、さう云つて別れたきり……。

朋子 ぢや、あなたが、ここへ来たことは知らないのね。

恒子 どうせ察してゐるでせう。

譲 しかしね、恒ちゃん、男つて云ふものは、……

朋子 そのお説教なら、もう澤山……。

譲 どうして……?

朋子 あたしが、さつき、恒子から云はれたんですの。なるほど、さういふことがあつたのでは、男つて云ふものはぐらゐぢや、承知ができない筈ね。(間) でも、まあ、兄さまのご意見を伺はうぢやありませんか。

譲 (少し固くなつて) さう開き直られても困るが、僕は、なにも、男の辯護をするんぢやない。し

かし、しかしだね、さういふ問題は、もう少し、動機から穿鑿せんさくしてかからないと、表面に現

れた事實だけでは、あんまり厳しい批評はできないものなんだ。

朋子 だつて、あなた……。

譲 まあ、待て。それでだね。僕が、一つ、先生に代つて、云ひ開きを試みようか。(間) ——

實はだね、あの時はだ、その友達に會つてさ、やあ、お楽しみとかなんと云はれてだね、少しテレ氣味になつてゐたんだ。友達に會つても、ろくに話もしないで、始終細君のそばにばかりくつついてゐたなどと、あの男のことだから、みんなに云ひふらさないものでもない。少し露骨だが、まあ、夜なんかでもだね。早くから二人つきりになりたがつてなどと、どうせ悪口を云ふに違ひないとね。それも少しいまいましい。よし、やつにさつぱりしたところを見せてやらう。それには、晩飯でも一緒にゆつくり食つて、酒でも飲んで……細君ばかりに興味をもつてゐるわけぢやない、といふところを見せるためには……。

恒子 (何か云はうとする)

譲 まあ、お聴きなさい。そこは頗る細君を信用し、また細君の信頼を利用して、どんどん事を運んだ。始めてみると、細君は、あまりご機嫌がよくない。そこで、涙をのんでですね、細君に一喝をくはせた。えらいぞ！と友達の眼は叫んだ。あたり前よ、と鼻をうごめかしながら、實は眼つきで細君に詫びたのだが、一向通じない。

朋子 およしになつたら、そんな常談口は……。

譲 常談は云つてやしない。ねえ、恒ちゃん。僕の話は、決して不真面目ぢやないでせう？ 調子でものを判断しちやいかんよ。どうせ、理窟で解決のつく問題ぢやないんだ。早く云へば、その時の氣分がわかればいいんだ。さうでせう？ 恒ちゃん。

恒子 (うつむいたままである)

譲 ぐづくづしてゐると、九仞の功を一簣にかく懼れがある。これは一層、この場を立ちのいた方が安全だ。なに、それも後でわかる話だ。よく話せばわかる。話さないでも、考へればわかつてくれる筈だ。聰明な彼女のことだから……。そこで、大に前後不覺を装つて、細君の前から姿を消したんです。もうそれくらゐでいい筈なんだが、相手の男が、どうもうるさい男で、なんだ、もう歸るのか、そんなに寂しいのか、とかなんとか云ひ出すので、どうせここまで来たならと、悪く度胸をすゑてしまつたんですね。さて、翌朝、友達をやうやく納得させて、やれやれと云ふわけで、細君のそばにとんで歸ると、案じた通り、ぼつねんと、彼

女は、眼をはらして待つてゐる。その時、西洋の男なら、——おお、わが愛する妻よ、いとしき者よ、さぞびつくりしただらう、悲しかつたらう、腹が立つたらう。わたしがお前を大事にしてゐるといふ證據には……などと、いろいろ優しさうな言葉を搜すんですが、日本の男は、それだけの心持を、ただその、なんでしたつけ……あ、そのにやにやで現し得るんです。西洋の女なら、またそこで——お前さんはどんなにわたしを悲しませたでせう。もうこれから、あんなことをしてはなりません。もしまた、これが最後でなかつたら、わたしは、どんな男のところへ走つて行くかわかりませんよ、てなことを云つて、亭主を脅迫するところですが、日本の女は、そこは心得たもので、顔を襟へうづめたまま、黙つて、疊のへりを見つめてゐる。それが、どれほど亭主を恥ぢ入らせることとせう。口を開いたところで、まあ、東京へ歸りませうくらゐな、極めて婉曲なね……。

朋子 あなたは、けふはよくそんなにお饒舌りがおできになるのね。もういいかげんになさらない？ たいがい解りましたわ。ねえ、恒ちゃん、兄さまの、その先はもう伺はなくなつて、わかるわね。

恒子 (うなづく)

譲 どうわかつたの？ そこで切られては皮肉のやうに聞えるが、さうぢやないんだよ。僕の云はうとしてゐることはですわ。つまり、あそこまでは、無事なんだ。問題はない。面倒になつたのは、ただその先へ行つてからだ。——おこつたの。いいえ……云々からです。しかしな

がら、それもですね、僕の解釋に従へば、ただ、一時の、感情のもつれ、と云ふか、云はばお互にすね合つてゐるだけの話ですな。

朋子 (ムキになり) 今おつしやつたことは、あなた、ほんたうにさう考へていらつしやることなの。と云ふと、どういふことになるかね。僕は、さつきお前から、ぢやない、恒ちゃんから聞いた話に基いてだね、最も常識的な考へ方をして見たまでだ。それでだね、もし恒ちゃんが、その時の事情やなにかを綜合してみたら、今僕が云つたやうなわけに違ひないと思へばだね、それはそれで、大した問題にしくつてもいいぢやないか。ただ、どういふふうにして、これから仲直りをするかといふ問題が残つてゐるわけだが……それは、至極平凡な問題だ。

朋子 だから、そんなことをご相談してゐるんぢやありませんわ。恒ちゃん、あなた、どう思ふ、今のお話……。

恒子 (遠慮深く) 姉さま、あたし、思つたことを云つていいこと？

朋子 ええ、ようござんすとも……。 (さう云つて夫の方を見る)

讓 僕には遠慮はいりませんよ。云ひ給へ、しかし、腹がすいて來たな。

朋子 ご飯はもういいんですけど、ちよつと、まあ、切りをつけてからにしませうね。その方がよくはありません？

讓 よからう。さ、恒ちゃんは、どういふの……？

恒子 今のお話ね、あれが男の方にとつては、立派な……云ひぬけかもしれませんけれど、あたしたち女、といふと大げさね、あたしだけの問題にしてもようござんすわ。あたしにしてみれば、それはちつとも、ありがたいことぢやありませんわ。男の、さういふ見榮は——女を踏みつけにして平氣であるといふ誇りなんかは、どつちみち、尊敬のできる習慣ぢやないと思ひますの。

朋子 それやさうね。

恒子 ですから、あたし、やつぱり、決心をしますわ。

讓 決心はまあ、もつと後でもできますよ。ぢや、どういふ理由があるにしても、それは免されなかつていふわけですね？

恒子 免す免さないぢやありませんわ。生活態度の違いなんですもの……。

朋子 さうね、全く……。

恒子 それが、そのことだけに現れてゐるんぢやないんですもの、その違ひが……。すること、なすこと、いちいち、あたしには見てゐられないんですの……。

讓 それは、いつからです？

恒子 その日からですわ、式を擧げてから……。

讓 急にですか。

恒子 急に目だつてきましたわ。

朋子 それは、向うの態度が急に變つたといふよりも、恒ちゃん、あなたの氣持に、その時から、

ある句切りができたからぢやないの？ さういふことはあつてよ。さあ、これからこの人と一緒に新しい生活をはじめると、さう思ふと、その人を、また新しい眼で見直すつていふふうになるんぢやなくつて？ その時、はじめて、夫としての、いろいろな細かい心づかひなんか、いちいち、自分の氣持を明るくしたり、暗くしたりするんだと思ふわ。それは、まあ、あたしの経験……（と云ひながら、夫の方に軽く笑ひかける）

（しきりに、うなづいて見せる。甚だ嚴肅な顔をしてゐる）
恒子 それもあるでせうね。

讓 それは、しかし、お互ひだよ。男の方から云つても、それと同じことが云へるんだ。それや、女ほど、そのことばかり氣にしてゐないだらうけれどね……。結婚してみると、やつぱりさうだつたのかと思ふことや、こんなだとは思はなかつたと感じることも、男の眼にだつて、さらに映るんだ。

朋子 （ちよつとテレて） つまり幻滅ね。でも、女の方は、なんと云つても、憤み深いし……。

讓 どうだか……。

朋子 男の生活に自分を従はせるといふ努力だけは……

讓 それやすさ、表面だけはね……。

朋子 いいえ、そのために、いろいろな犠牲まで拂つてゐます。

讓 どんな犠牲……？

朋子 夫の趣味に合はなければ、自分の趣味も犠牲にしてゐます。

讓 音楽のことを云ふんだらう？

朋子 いいえ、そればかりぢやありません。

讓 そればかりでなければ、なんだ。ああ、さうか、あのことを云ふのか。（笑ひたさうな、皮肉な眼つきをして、天井を見上げる）

朋子 なんですの。なんのことですか？

讓 人に訊く奴があるか。

朋子 （笑ひながら） あれは、昔のことですわ。とにかく、あたしにさういふことをおつしやる資格は、あなたにはありませんわ。恒子の前で、あんまり變なことをおつしやらないで下さい。

恒子 姉さま……。

朋子 いいのよ。兄さまは、すぐあれなの、誰の前でも……。

讓 （笑ひながら） ぢや、恒ちゃんの旦那さんとおんなじだ？

恒子 うそよ、兄さまは好い方よ。第一、新婚旅行で、姉さまの寫眞を八十枚もおとりになつた方ですもの……。

讓 よく覺えてるなあ。恒ちゃんの旦那さんは、とらなかつたかい？

恒子 寫眞機なんて、洒落れたものを持つてるもんですか。ステッキだつて持つてやしませんわ。

朋子 あら、ステッキを持つて歩かないの。ぢや、何を持つて歩くの……？ 蝙蝠傘……？

恒子 それと、鞆よ。両手で、大きな鞆を提げて歩くの。赤帽なんか持たせないの。だつて、自分で持つてるつていふんですもの……。

譲 力は強いんだね。

恒子 (暖) ええ。汽車から降りる時なんか、人の荷物までおろしてやるのよ。

朋子 さういふところは、なかなか深切ぢやないの。

恒子 それでゐて、あたしが乗つたり降りたりする時は、手も貸してくれないの。自分一人、どんどん先へ行つちまふの。

朋子 東京驛から、ずつと眠り通しなんですつて……。

譲 だれ？

朋子 あの人がですよ。恒子なんかにはかまはずに、グウグウ、高いびきをかいてるんですつて……。口をあいて……。

譲 鼻が悪いんぢやない？

朋子 行儀が悪いんですよ。宿屋なんかにも、ずるぶん、そばでハラハラするやうなことがあるんですつて……。この人の前で、女中に常談を云ふことなんか平氣らしいのね。ご飯のたべ方だつて、それや下品なんですつて。まるで紳士らしいところがないつて云ふの。(夫の顔を見つめる)

譲 そんなことは、まあいいさ。(妻の視線を避け) 別に大したことぢやない。

朋子 一番見てていやなのは、なんでも、わざとつまらなさうな顔をする事なんですつて……。

いくら景色がよくつても、景色がいついていふではなし、何か食べれば、きつとまづさうにして食べるし、おみやげを買つて云へば、荷物になるつて變な顔をするし、それや張合がないらしいのね。

譲 (自分のことを云つてゐるのではないかといふやうな、くすぐつたい微笑)

朋子 その上、不精なんですつて……。お湯から上つても、髪は解かず……。(夫の櫛をあててない髪を見上げ) 爪がのびたらのびたまま……。(譲、それとなく、自分の爪を見る) 少し散歩しませうつて云へば、海ならここに寝ころんでたつて見える、散歩なんてくたびれるばかりだ、かうなんですつて……。

譲 (さうよ、自分に思ひ當ることがあるらしく、小鼻をふくらませて、恒子の方を見る)

恒子 (これはまた、姉の驚くべき想像力にやや不審を抱くと同時に、いくらか、尊敬をさへ拂ひたい氣持になる)

朋子 (益々雄辯に) そのくせ、つまらないところで威張つて見せるのね……。蒲郡つて何縣だつて訊くから、そんなわかりきつたことと思つて、返事をせずに見せるのね……。さうしたら、いい氣になつて、日本地圖を書いて、どこの所か圓をつけて見ろつて、學校の先生みたいなことを云ふんですつて……。出来ないんだと思つて、あまりしつこく云ふから、さつさと日本地圖を書いてやつたんですつて……。さうしたら、本州だけしか書いてないのに、なんだ、それや茄子なすびかつて……。

恒子 胡瓜よ、姉さま。

朋子 さうさう。胡瓜かつて訊くんですつて……。

讓 なるほどね。(笑ふ)

朋子 随分失禮ね。(問) それやこれや、ちつとも新婚らしい氣持になれないんでせう、あんまり殺風景で……。はじめからそれぢや、少し可哀想ね。

讓 それで、お前は、どう思ふんだい？ 恒ちゃんに賛成なのか。(問) さう簡単には行くまい？

(問) 第一、お前だつたらどうする？

朋子 恒子とあたしとは違ひますよ。自分の立場からでは判断はできませんわ。恒子は、あたしなんかよりは、理想も高いんですし……。

恒子 そんなことありませんわ。でも、こんなことをご相談するつていふのが、間違つてゐるかもしれませんわね。自分では迷つてなんかないつもりなんですけれど、あとで、なぜ一言あたしたちの耳に入れなかつたつて、さうおつしやられるにきまつてると思つたもんですから、とにかく、お話ししてみたんですの。でも、いろいろ参考になりましたわ。

朋子 ぢや、やつぱり別れるつもり？

恒子 ええ。

讓 しかし、恒ちゃん、それ以上の幸福が、先に待つてゐると思つたら間違ひだよ。もう一度結婚するやうなことがあるとしてだね、その結婚が、より不幸な結婚かもしれないといふこと

だけは考へておく必要があるね。そんな結婚ならしないと云ふかもしれないが、結婚といふものは、今度でもわかる通り、實際してみないとわからないものだ。さうでせう？ 尤も、あてにならない幸福を探り當てるために、自分の運命を切り開いて行く決心なら別だ。倒れては起き、倒れては起き、さうして、たうとう行き着く所へ行きつかないで力が盡きる、さういふ生活をすら意義のある生活だと思へば、これや、また別だ。ね。理想的の夫を見つけ出すまで、つぎつぎと、男から男に移つて行くつていふやうなことは、これやできないでせう？ 果して、恒ちゃんが、これならと思ふやうな男に出會ふチャンスが、確實にありますか。あるとは云へませんね。さうすると、もしチャンスがない場合にどうするか、そのことも一應考へておかなければなりませんね。離婚といふ問題は、これやなかなかむづかしい。(問) だつて、やつぱり離婚でせう？ 結婚してゐるんだから……。

朋子 さうね。たつた一週間やそこらだけ……。

讓 それは、一緒にゐる期間が短かければ、それだけ、まあ、損失は少いわけです。然し、一番大事なものは失つてゐるんだ。

朋子 (痛ましげに恒子の方を見る)

讓 月並な議論だけれど、普通の貞操觀念に従へば、あんたはもう、處女として夫を選択する資格はないんですからね。それで、たとへ、やや理想的な再婚ができたとしてもです、新しい夫婦關係は、全く純粹なものぢやない。何か、こだはりがあるに違ひない。二人が愛し合へ

ば愛し合ふだけ、そのこだはりが目だつてくるものなんです。さういふ関係を、それや、相手の努力によつて、非常に美しいものにすることもできる。しかし、それは先づ例外だ、と云つていいですね。

恒子 あたくし、別に再婚しようとも思つてゐませんし、今別れば、明日から幸福に生活ができるとも思つてゐませんけれど、いやいやながら、ああいふ人と一緒にゐるといふことが、全く無意味に思へてならないんです。さういふ夫を選んだ軽卒さは、別の方法で罰せられてもいいと思ふんです。例へば、一生獨身で暮すといふやうなことから、甘んじて忍べるだらうと思ひますわ。それだけの覺悟があるなら、今ひと思ひに別れてしまつた方が、却つて自分に忠實ぢやないかと思ふんですけれど……。

譲 自分にだけ忠實でも、仕方がないでせう。

朋子 さうよ。自分のことだけ考へてちや駄目よ。

恒子 ぢや、だれのことを考へるの？

朋子 みんなのこと……。第一に、母さまのことよ。どんなに心配なさるかshれないわ。

譲 いや、それより第一に、旦那さんのこと考へてみようぢやありませんか。あなたは、先生を取り返しのつかない不幸に陥れるかも知からないんですよ。さういふ時はどうします。平氣でをられますか。向うはどうなつても、かまはないんですか。

恒子 そんなことおつしやつたつて、兄さま、あの人は、あたくしのことを考へてはくれないん

ですもの……。それよりも、二人の幸福を、平氣で蹂み躪つてゐるんですもの……。二人の生活を楽しいものにするつていふ希望が、あの人のどこにも現れてゐないんですもの……。さうしてみれば、あたくしの方ばかり、ああもしよう、かうもしよう、つて骨を折つてみても、無駄ぢやありません？

譲 無駄かどうか、まだわかりませんよ、一週間やそこらぢや……。

恒子 (涙聲で) 兄さまは、あくまでも、あたくしに、忍従生活をおすすめになるのね。二人が力をあはせてすべきことを、あたくし一人にしろとおつしやるのね？ 姉さま、あたくしはいやよ、それは……。 (涙を拭く)

沈黙。

それや、向うにする意志はあつても、力が足らなくて、それができないなら、一人でやつてみますわ。どこまでもやつてみますわ。しかし、する力があつて、しないのなら……。する意志がないのなら、あたくし、どうしても、そんな元氣は出ませんわ……。さうする興味もありませんわ。いやです、いやです、死んでもいやです……。 (聲を忍んで泣く)

朋子 (貫ひ泣きをしながら、聲だけは快活に) しつかりなさいよ、泣いてなんかゐる時ぢやなくてよ。困るわね、かういふのは。……。別段、あなたを不幸にしようと思つてるわけぢや、もちろんないでせうし、どうかすると、自分はあたり前のつもりでやつてることが、あなたの氣に入らない……。まあ、それや、あなたただけでなく、どんな女の氣に入る筈もないでせうけれどね

——氣に入らないばかりでなく、それが、あなたの生活まで暗くするつてんでせう？ ありさうなことね。だけど、向うにわる氣はないとすれば、どうでせう、ぼつぼつ、氣長に、直してみることはできないかしら……。

恒子 性格だから、駄目よ……。

朋子 さうね、ただ無作法つていふのと違ふんだから……。

讓 やつぱり程度の問題だね。男つていふものは、多少、さういふ缺點をもつてゐるよ、女から見ればね。性格とかなんとか云つたところで、結局、習慣さ。無責任なことは云へないが、恒ちゃんがもし、男の我儘を許さないといふ主義で行くなら、男の従属物たる地位を潔く棄てることだ。さうして、文字通り愛し合ふためには、文字通り對等の能力を示すべきです。

恒子 對等の能力つて云ひますと、經濟的に獨立することをおつしやるんでせう？

讓 經濟的とは限りません。例へば、僕が學校の教師をする。(妻を見返り) こいつが商店の事務員になる。

朋子と恒子とは、顔を見合はせる。

朋子 (心外らしく) こいつとはなに……？

讓 親密な關係を表はす呼び方だよ。然し、それで決して、女が獨立してゐるとは云へません。こいつは、何かつていふと、僕のところへ來て、ねえ、あなた、どうしませう……？

朋子 うそばつかし……。

讓 うそなもんか。ねえ、これぢや、對等の能力とは云へますまい。

朋子 でも、お互にさういふふうにすればいいんですわ。どんなことでも相談し合つて……。

讓 ——ねえ、あなた、どうしませう……。

朋子 もう澤山ですよ。

讓 うるさい話ですな、どうも……。恒子さん、とにかく、けふはお歸んなさい、旦那さんのそばへ……。さうして、知らん顔をして芝居をおねだりなさい。僕たちもお伴をしますつて……。

朋子 (陽氣に) それがいいわ。(しんみり) ね、さうなさい。

恒子 (その氣持にのりかねて、何か遠くのものを見つめてゐる)

讓 (靜かに起ち上り) 僕は、ちよつと、食事までに、頭を直して來ます。ついでに爪もきつて來ます。

恒子 (姉の顔をちらと見て、軽く笑ひかけるが、急に眞顔になり) マダム・ツネコ・サイトウの陪食を仰せつかつてゐるんだから……。

朋子 (姉の顔をちらと見て、軽く笑ひかけるが、急に眞顔になり) 姉さま、あたし、けふは歸して頂くわ。折角ですけれど、なんだか落ちつかなくて……。

朋子 歸るつて、どつちへ……？

恒子 (低く) 大久保……。

朋子 (これも低く) やつぱり……。

長い沈黙。

恒子 ぢや、兄さま(起ち上り) ご免遊ばせ。つまらない事をお耳に入れて、ほんとに……。

譲 もつとよく考へてご覧なさい。(妻に) お前、なんなら、送つて行かないか。

朋子 ええ。ぢや、どう、恒ちゃん、今から向うへ行つたつて、どうせ……。

恒子 ええ、でもいいのよ、心配しないで頂戴……。ぢや、さよなら……。また伺はせて頂くわ、あしたにでも……。

朋子 さう。でも、ちよつと送つて行くから、待つてて頂戴。

恒子 いいのよ、姉さま。ほんとに……大丈夫よ……。

一同が座を起つた時、驟雨沛然として到る。

三人は、無言のまま、窓越しに外を見つめる。

恒子、大きな溜息をつく

朋子 なんていふお天氣でせう。

譲 すぐ止むだらう。もう少し休んでいらつしやい。

長い沈黙。

— 幕 —

大正十五年十月

葉 櫻 一 幕

母 娘 母 娘 母 娘

娘 (顔をあげ、無邪氣らしく) あたし、どうでもいいわ。
 (わざと素氣なく) 母さんもどうでもいい。(問) どうでもいいことはないよ。(問) お前も少しは
 考へたら……? 考へるつて……。だから、あたし、母さんのいいやうにするわ。
 母さんは別に異存はないよ。ただお前の氣持さ、大事なのは……。
 ……………。
 娘 それと、あの人の態度……、わからないのはね……。見合をした、氣に入つた、貰はう、そ
 れで、こつちにすぐ返事をしろ……これぢや、お前、あんまりお手輕すぎるからね。あれか

四月下旬の眞晝。
 母の居間——六疊。

開け放された正面の圓窓から、葉櫻の枝が覗いてゐる。
 母は、縫ひものをしてゐる。
 娘は、その傍で、雑誌の頁を繰つてゐる。——問。

娘 母

ら、もう一月にもなるんだし、なんとか、本人から……話がありさうなもんぢやないか、そのことについてさ……。それとも、直接お前になにか云ふことは云つたのかい？ お前の氣持を聞いて見るつていふやうなことはしたの……。

娘 (首を振る)

母 ぢや、お前と二人つきりの時は、どんな話をするの。

娘 どんな話つて……黙つてる時の方が多いわ。それよりね、變なのよ、あの人。それや、をかしいの。

母 なにが？

娘 それがね、二人つきりの時は、まあ、いいのよ。あたり前なの……。ところが、あの人うちへ行くと、急に態度を變へちまふの。お母さんや妹さんのそばだとよ。まるで、あたしに素氣なくするの。

母 どういふふうに……。

娘 第一、口をきかないの。それから、顔もみないの。

母 へえ。

娘 なんていつていいかしら……とてもつまらなさうな様子をするの。すぐ欠伸あくびなんかして……。

母 へえ。

娘 をととひだつてさうだわ。ダリヤの球根を持つて行つてあげた時ね、あん時なんか、みんな

お庭にゐたのよ。それに、あの人だけ、あたしの方を振り向きもしないの。おまけに、云ふことが云ふことなのよ。「そんなものを貰つたつて、植ゑるところがないや」——かうなの。あたし、泣きたくなつたわ。

母 随分をかした人だね。でも、二人つきりの時は、そんなでもないんだらう？

娘 (うなづく)

母 優しくすることはするんだらう？

娘 優しくつて……。

母 いいえさ、いくらかお前の機嫌をとるやうにしやしないかい？

娘 機嫌をとるやうにつて……。

母 つまり、お前が好きだとか、嫌ひだとか、云ひさうなもんぢやないか。

娘 そんなこと、云はないわ。

母 云はないことがあるもんか。

娘 だつて、云はないんですもの……。

母 それぢや、お前、どうにもならないぢやないか。

娘 だからそれでいいわ。(雑誌に顔を近づける)

母 なにがいいのさ？

娘 どうにもならなくつても……。

母 是非つて云はれたところで、向うのお母さんばかりがその氣になつてゐて、肝腎の本人がそれぢや、たよりなくつてしやうがないぢやないか。(間) ぢや、いいから、あの人がお前にどんなことを云つたか、それを残らず云つてご覽、云つた通りにだよ。お前たち二人つきりて話をしたのは、一度、二度……、それからをととひ、歸る途中と、それだけだね。さ、初めの日は……。

娘 待つて頂戴よ。あん時は、たつた五分かそこらなんですもの……。話す暇なんかありやしないわ、(考へながら) さうさう、でもこんなことを云つたわ——「學校生活が懐しくはありませんか」——つて。「ええ」つて云つたら、「はゝゝゝゝ」つて笑ふの。

母 なぜ。

娘 なぜだか……。それから、あたしが、「この邊はお静かですよろしうございますわね」つて云つたら、「よその家へ行くと、さういふ氣がするんですよ」だつて……。それから、「ラヂオをお引きになりませんの」つて訊いたら、誰でもすることはしたくないんですつて……。少……？ (と云つて、頭の横へ指で旋毛を書く)

母 さういふところがあるかもしれないね。それだけかい？

娘 初めの日は、それだけよ。その次ぎは、ここでよ、母さんが、そら、買物にいらしたお留守よ。歸る歸るつて云ひながら、二時間もゐるの。

母

それで、大分話が出来たわけだね。

娘 さうでもないの。あたしの方からなにか云はなけれや、黙つてるの、煙草ばつかり喫つて……。 (笑ひをこらへて) あの人の、一つ癖があるの。かういふ癖…… (と云ひながら、入さし指で鼻の頭を撫で) それが、たださうするだけならいいのよ。さうしたあとで、きつと、鼻の頭をかう摘んどくの。

母

馬鹿だね、お前は。それより、あの人の云つたことをすつかり云つてご覽。

娘 あの人はね、かういふの——「僕はまだ結婚なんかしたくはないんだけど、お袋が——さうさう、お袋つていふのよ——お袋がやかましく云ふものだから……」つて。

母

それぢや、お前……。

娘

ええ、だからよ、それぢや、あたし、いやだつて云はうかと思つたの。

母

思つただけぢやしやうがないぢやないか。(間。獨語のやうに) やつぱりさうなんだね。

娘 そのくせ、あたしに、ぶらぶら遊んでる男は嫌ひだらうつて訊くから、嫌ひつていふこともないけれど、自分で働いて、自分の力で生活できる人の方が頼み甲斐があるつて云つたら……。

母

そんなことを云つたのかい？

娘

ええ、さうしたら……。

母

さうしたら……？

娘 さうしたら、僕もそのうち、何か仕事を見つけようかなあつて、誰につていふことなしに云つて見たりするの。

母 さういふところを見ると、まんざらでもないんだね。(雜物の一端を娘の方に差出し) さ、ちよつとここを持つてておくれ。だけど、をかしいぢやないか、もう、その氣であるのかしら……返事を聞かないうちから。

娘 さうよ。

母 まだなにか云つたの？

娘 日本間が好きか、西洋間が好きかつてあたしに訊くから、それや西洋間が好きだつて云つたら、そんなら離れを西洋間にしようかなあつて云ふの。

母 なんでも、なあぢやないか、あの人は。

娘 さうよ。

問。

母 どうしたもんだらうね。別に相談をするつていふ人もないし……。なにしろお前がしつかりしてゐてくれなくつちや困るよ。(問) 貰つてやらうぢや、いやだ、あたしは。本人が是非呉れと云ふんでなくつちや……。そこがどうもはつきりしないね。

娘 そのことは、母さんに委してあるらしいのよ。

母 さうして安心してるのかい？

娘 安心してるかどうか、知らないけれど……。

母 自分はどうでもいいつていふやうな顔がしたいんだらう？

娘 あたしだつて、母さんがいいつていふやうにするんぢやないの。

母 お前は違ふよ。(問) だからさ、こんだ、お前から訊いてご覧よ——一體、あたしを呉れつておつしやるのは、あなたなのですか、それとも、あなたのお母さんなのですかつて……。

娘 いやよ、あたし、そんなこと訊くのは。

沈黙。

母 ね、お前も女ぢやないか。母さんの云ふことはわかるだらう？ (問) 男のご機嫌をとつて一生を暮すやうなことは、お前だけにはさせたくない。ね、いいかい。どんな女でも、生涯に一度は、自分をほんたうに愛してくれる男に出會ふ筈だ……。その男は、お前のためにお前を愛してくれる男でなければ……。 (問) けふは、お前に、あたしの昔噺をして聽かせよう。——あたしが、お前の父さんのところへ來たのは、丁度お前と同じ年、十九の春だつた。もちろん、その時分だから、結婚前の交際なんていふことは、だれも考へてゐやしなかつた、あたしは、夢うつつてお嫁入をさせられてしまつたのさ。見合ひはね……。それや、したにはしたけれど、形ばかり……。婚禮の日に、初めて知つたくらゐだもの、お父さんの眼が、片一方、あんなふうだつていふことを……。それだけならまだいいのさ。その晩、お父さんは、お酒に酔つて、お友達と一緒に、どつかへ行つておしまひになるつていふ騒ぎ……。なに、